

中垣内遺跡発掘調査報告書

——大東市立市民体育館建替え工事に伴う——

1997年3月

大東市教育委員会

序 文

大東市寺川にある市民体育館は、昭和54年の完成以来、市民のスポーツ・レクリエーションの拠点として多くの方々に利用され、またこの間市民スポーツの普及と振興に大きな役割を果たしてまいりました。今日、市民のスポーツに対する関心は、ますます高まっているものと思われます。

このような情勢のなか、本平成9年に大阪府で2巡目の国民体育大会「なみはや国体」が開催されることになっています。大東市ではバドミントン競技が行なわれることになっており、市民体育館を競技会場として使用することになりました。しかし公式競技を行なうには従前の体育館では不十分であるため、施設の拡充を図るために、市民体育館を建替えることになり、昨平成8年に竣工いたしました。

今回報告いたしますのは、その工事に先立ち実施しました埋蔵文化財調査に関するものであります。調査では、縄文時代～近世に到るまでの各時期の貴重な遺構・遺物が新たに発見され、当地では、太古より人間の活動があったことが判明しています。これらの貴重な調査成果が地域の歴史研究の一助になれば幸いと存じます。最後になりましたが、調査、整理について多大なる御協力を頂いた、関係諸機関、諸氏に感謝の意を表するとともに、国体の成功と、そして新しく完成した体育館が、国体終了後も、市民の誰もが気軽にスポーツ・レクリエーションを楽しめるような場所として今後とも利用されていくことを願う次第です。

平成9年3月

大東市教育委員会

教育長 大 東 元 二

例　　言

1. 本書は、大東市教育委員会歴史民俗資料館が同スポーツ振興課より依頼を受けて、調査を実施した、大東市寺川1丁目地内に所在する市立市民体育館建替え工事に伴う発掘調査報告書である。
2. 調査は歴史民俗資料館技術吏員黒田淳を担当者として、現地調査を平成6年11月14日に開始して平成7年3月23日まで実施し、その後、引き続き平成7年12月22日まで内業整理作業をおこなった。
3. 調査および整理の実施にあたっては、山田芳樹、小山和高、清水崇子、井尻由美子、坂根賞恵、野村香枝、宮澤淳也、足立光生、今井加奈子、大谷聰、萩野登、吉野正泰、甲斐範浩諸氏の協力を得た。記して感謝の意を表する。
4. 現場での発掘作業については、建設部の協力を得た。また、調査事務に関しては体育馆、スポーツ振興課の他に、宮田八重子の協力を得た。記して感謝の意を表する。
5. 調査期間中は、帝塚山短期大学教授田代克巳氏から有益な助言を得た。また、縄文土器に関しては、大阪府教育委員会文化財保護課技師大野薫氏から多大なる御教示得た。記して感謝の意を表する。
6. 花粉分析ならびにプラントオパール分析は川崎地質株式会社に委託し、その報告を本末に掲載している。
7. 本書の執筆、編集および、遺構写真、遺物写真の撮影は黒田淳が行なった。
8. 調査において作成した写真、実測図、カラースライド等は大東市立歴史民俗資料館に保管されている。広く利用されることを希望したい。

本文目次

序文

例言

第1章 調査に至る経過	1
第2章 地理的歴史的環境	3
第3章 調査方法と調査区の地区割	8
第4章 基本層序	10
第5章 調査成果	14
第1節 第1遺構面の遺構と遺物	14
1. 遺構	14
2. 遺物	18
第2節 第2遺構面の遺構と遺物	19
1. 遺構	19
2. 遺物	20
第3節 第3遺構面の遺構と遺物	22
1. 遺構	24
2. 遺物	25
第4節 第4遺構面の遺構と遺物	26
1. 遺構	29
2. 遺物	33
第5節 第5遺構面の遺構と遺物	34
1. 遺構	34
2. 遺物	39
第6節 第6遺構面の遺構と遺物	39
1. 遺構	39
2. 遺物	43
第7節 その他の出土遺物	44
第6章 まとめ	49
付載 市立市民体育館埋蔵文化財発掘調査に伴う花粉等分析報告	

挿図目次

第1図 調査地位置図	1
第2図 大東市位置図	3
第3図 市内遺跡分布図	5・6
第4図 調査区配置図	8

第5図 調査区区割図	9
第6図 調査区土層断面模式図	11・12
第7図 S D-08・09平面図	14
第8図 S D-12・13平面図	15
第9図 S D-14・37平面図	16
第10図 第1遺構面出土遺物（1）	18
第11図 第1遺構面出土遺物（2）	19
第12図 S D-16平面図	19
第13図 S D-15平面図	20
第14図 第2遺構面出土遺物	21
第15図 出土錢貨	21
第16図 S K-05平面図	22
第17図 S B-01平面図	23
第18図 A-12～17区水田跡平面図	24
第19図 B区第3遺構面平面図	25
第20図 第3遺構面出土遺物	25
第21図 S D-17平面図	26
第22図 A-1～11区第4遺構面平面図	27・28
第23図 S N-08平面図	29
第24図 S N-09平面図	29
第25図 S I-01土器出土状況	30
第26図 S I-02・03土器出土状況	30
第27図 B区第4遺構面平面図	31
第28図 第4遺構面出土遺物	31
第29図 S I-01～03出土遺物	32
第30図 S R-03平面図	34
第31図 A-1～11区第5遺構面平面図	35・36
第32図 S R-05しがらみ検出状況	37
第33図 B区第5遺構面平面図	38
第34図 第5遺構面出土遺物	39
第35図 S K-09平面図・縄文土器出土状況	40
第36図 A-1～11区第6遺構面平面図	41・42
第37図 S K-09出土縄文土器	44
第38図 縄文土器推定復元図	44
第39図 石器実測図	45
第40図 S R-05出土杭（1）	46
第41図 S R-05出土杭（2）	47

表 目 次

第1表	A区第1遺構面ピット一覧表	17
第2表	A区第2遺構面ピット一覧表	21
第3表	A区第3遺構面ピット一覧表	22
第4表	A区第3遺構面畦畔一覧表	22
第5表	B区第3遺構面ピット一覧表	23
第6表	A区第4遺構面ピット一覧表	33
第7表	S R-05出土杭観察表	48

付 図

- 付図1 第1遺構面全体図
付図2 第2遺構面全体図
付図3 第3遺構面全体図
付図4 第4遺構面全体図
付図5 第5遺構面全体図
付図6 第6遺構面全体図

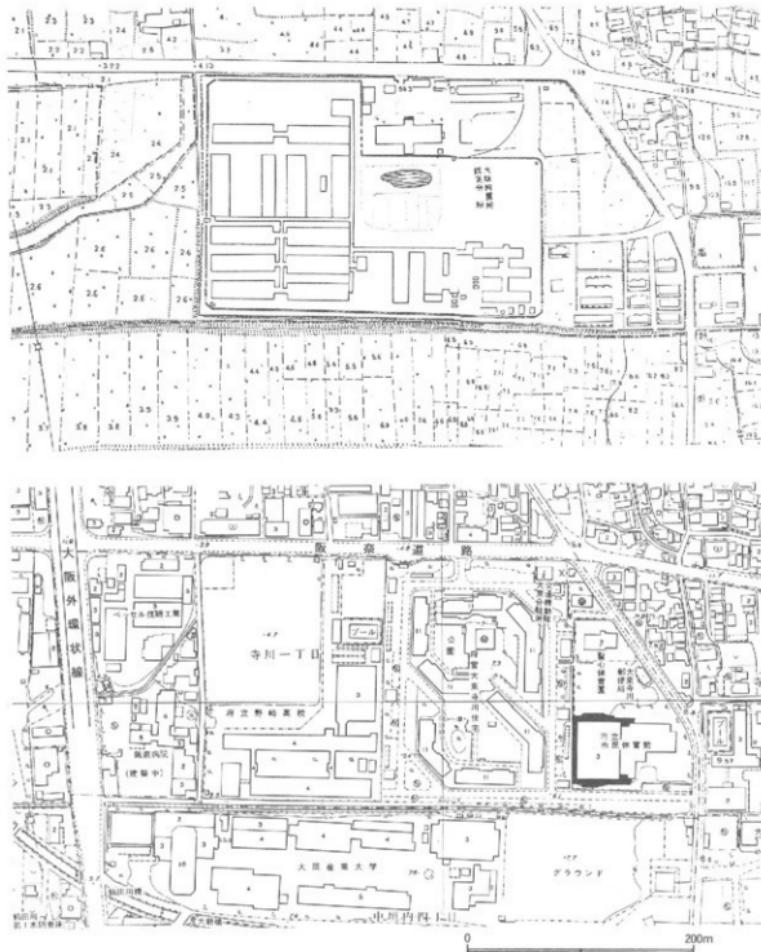
図 版 目 次

図版1	調査前の状況 上 A-20~29区(西より) / 下 B区(西より)	
図版2	A区第1遺構面 上 SD-13・14他検出状況(東より) / 下 SD-12・13検出状況(西より)	
図版3	A区第1遺構面 上 SD-09他検出状況(北より) / 下 SD-04他検出状況(東より)	
図版4	A区第2遺構面 上 SD-16他検出状況(東より) / 下 SD-15検出状況(西より)	
図版5	A区第3遺構面 上 SB-01検出状況(東より) / 下 SP-49・50検出状況(北より)	
図版6	A区第3遺構面 上 水田跡検出状況(南より) / 下 水田跡検出状況SN-01~03(南より)	
図版7	A区第4遺構面 上 SD-17検出状況(東より) / 下 SD-17土器出土状況(東より)	
図版8	A区第4遺構面 上 SD-18・19、SK-14他検出状況(南より) / 下 SI-01土器出土状況(南より)	
図版9	A区第4遺構面 上 SI-03土器出土状況(西より) / 下 SI-02土器出土状況(東より)	
図版10	A区第4遺構面 上 SN-08検出状況(南より) / 下 SN-09検出状況(西より)	
図版11	A区第4遺構面 上 SN-09検出状況(東より) / 下 SN-09検出状況(南より)	
図版12	A区第5遺構面 上 SR-04・05、SD-25・26他検出状況(東より) / 下 同上	
図版13	A区第5遺構面 上 SD-20検出状況(西より) / 下 SD-21検出状況(南より)	
図版14	A区第5・6遺構面 上 第5遺構面SR-05しがらみ検出状況(北より) / 下 第6遺構面	

- S D -36、S R -05他検出状況（東より）
- 図版15 A区第6遺構面 上 S K -09他検出状況（西より）／下 S K -09縄文土器出土状況（西より）
- 図版16 B区第3・4遺構面 上 第3遺構面 S D -01・02、S K -01他検出状況（西より）／下 第4遺構面 S R -01、S K -02検出状況（南西より）
- 図版17 B区第5遺構面 上 S R -02、S D -03検出状況（南東より）／下 S R -02土層断面（南東より）
- 図版18 遺物 染付段重、仏飯器、土人形、土鈴、土馬、紡錘車、錢貨
- 図版19 遺物 上 染付碗、美濃菊皿、陶製擂鉢／下 東播系須恵器、瓦器椀、羽釜
- 図版20 遺物 上 第2・3遺構面出土須恵器／下左 第3遺構面出土土師器壺 下右 S R -05出土弥生土器無頸壺
- 図版21 遺物 上 第3・5遺構面出土弥生土器／下 第4遺構面出土弥生土器、土師器高杯
- 図版22 遺物 上左 第4遺構面出土高杯 上右 弥生土器把手付小形鉢／下左 S I -03出土弥生土器壺 下右 S I -03出土弥生土器壺
- 図版23 遺物 上 S I -02出土弥生土器壺／下左 S I -02出土弥生土器壺 下右 S I -03出土弥生土器
- 図版24 遺物 S I -01出土弥生土器壺
- 図版25 遺物 上 S K -09出土縄文土器（口縁部）／中 S K -09出土縄文土器（底部）／S D -26出土土器
- 図版26 遺物 上 S K -09出土縄文土器／下 同上
- 図版27 遺物 上 砧石／中 石器 石礫、石錐／下 石器 刻片
- 図版28 遺物 B区出土土器 青磁、瓶把手、弥生土器

第1章 調査に至る経過

かつて、大東市寺川には大阪拘置所四条拘禁所が所在した。先の大戦中は軍需工場として利用され、戦後、進駐軍の駐屯地を経て拘置所となったものである。その同拘置所が昭和47年に大阪市都島区へ移転することになったため、約85,400m²もの広大な敷地が残すことになった。これに伴い大阪府は、この土地を有効利用したいと考え、国からの払い下げを受け、跡地利用として、ここに府営住宅と府立高校



第1図 調査地位置図 上 昭和31年大東市都市計画図
下 平成7年大東市全図

の建設を計画した。これが現在の府営大東寺川住宅と府立野崎高校である。一方、大東市では当時市民の体育施設がなかったため、府の協力を得て、跡地の一部に市民スポーツの普及、および振興を図るために、社会教育施設のひとつとして市民体育館の建設を計画し、昭和54年に完成している。しかし、これまで多くの市民に利用され、市民スポーツの拠点としての役割を果たしてきた市民体育館も、建設から10数年経ち、建物の部分的な改修の必要が生じ、また各種公認競技大会を開催するには、施設として不十分な点が目立つようになってきた。こうした状況の中で大東市は、平成9年に大阪府で開催される第52回国民体育大会（なみはや国体）のバドミントン競技会場になることが決定された。このため国体の公式競技に十分な機能を果たすことができ、そして、国体終了後も市民のスポーツ、レクリエーション、憩いの場として幅広く利用できるような施設が必要となった。以前より大東市では体育施設の不足が指摘されており、これを機に新体育館を建設する声があがった。大東市では新体育館建設について早急に種々の案が検討されたが、用地取得の問題、本市財政状況の逼迫等を考慮すると、現段階では新体育館の建設は困難であるという結論に達し、結局、寺川にある既存の市民体育館を建て替えることで、国体会場に充てることになった。したがって前記の理由により、建て替え計画はコストの低減を図るため、既存のアリーナを解体・撤去はするが、その基礎杭、地中梁は出来得る限り利用して、新たに国体時に6面のバドミントンコートの同時使用が出来るアリーナスペースを確保し、696席の観客席をその周囲に増築するということになった。

既存の体育館建設当時には発掘調査は実施されていなかったが、その後周辺の調査の結果、当該地は周知の包蔵地である中垣内遺跡に入り、しかも市域でも遺跡の分布が多い所でもあるため、市教育委員会は関係部局に対し、新たに基礎杭、地中梁を設置する箇所については事前の確認調査の必要性を説いた。その後建設部と協議を重ねた結果、遺跡の確認調査として試掘調査を実施することになり、平成5年4月7～9日に建物増築部分と浄化槽新設部分を対象として試掘調査を実施した。試掘調査の結果双方で弥生土器、須恵器、土師器等の遺物包含層を確認することが出来た。これらの結果に基づき、発掘調査の必要があると判断し再度協議を行い、調査面積約1206m²を対象として、平成6年11月より発掘調査を実施することになった。

調査日誌抄

- 平成6年11月14日 B区（浄化槽部分）の機械掘削開始。
- 11月15日 B区人力掘削開始。A区（増築部分）の機械掘削開始。
- 11月20日 B区の人力掘削進む。上層（第1・2遺構面）の遺構は削平のため消失していた。
- 11月24日 A区機械掘削終了。B区第3遺構面の空掘。
- 12月19日 B区の調査は終了し、埋め戻し開始。A区では攪乱が多く、調査が進まず。
- 12月28日 仕事納め。A区では第1遺構面の水路が検出され始めている。年内に空掘をしたかったが、できなかつた。
- 平成7年1月5日 仕事始め。
- 1月12日 A区第1遺構面空掘。
- 1月17日 未明、阪神・淡路大震災発生。幸いにも現場での地震による被害は無し。
- 1月23日 A区第2遺構面精査。弥生大型の壺（S I-01）出土。
- 2月4日 A区第3遺構面ピット（S B-01）検出。
- 2月9日 A区第3遺構面水田跡の足跡実測作業。
- 2月24日 A区第4遺構面空掘。
- 3月4日 ジュニア歴史教室の子供達、現場を見学。説明をする。
- 3月14日 A区第6遺構面SK-09より縄文土器出土。花粉分析用の土採取作業。
- 3月14日 S R-05の杭取り上げとA区の土層断面実測が終了。現場での作業がすべて終了。

第2章 地理的歴史的環境

中垣内遺跡は、大阪府大東市中垣内から平野屋、寺川、東大阪市善根寺町にかけて所在し、関西電力東大阪変電所を中心として東西約1000m、南北約800mの広がりをもつと推定されている遺跡である。遺跡発見の歴史は比較的古く、昭和34年関西電力東大阪変電所建設工事の際に、弥生時代前期の遺物が発見され周知されるようになり、現在に至っている。遺跡発見当時においては、変電所敷地の北東隅（南地区）と敷地の北側（北地区）で簡単な調査が実施されたにすぎなかったが、堅穴住居跡や杭列が検出され、大量の弥生時代前期の土器の他に磨製石斧、石包丁、打製石鏟、獸骨、淡水性貝殻、炭化米、木製鋸、網代などの遺物の出土が報告されている。これを契機にして、ここに弥生時代前期の集落が存在しているということが明らかになった。

中垣内遺跡の所在する大東市は、大阪平野の東部に位置し、北は門真市、寝屋川市、四条畷市に、東

は東南端で一部が奈良県生駒市に接する他は四条畷市に、西は大阪市、南は東大阪市に接している。地勢のほぼ東半分は山地で、生駒山系の一支脈である飯盛山が南北に連なっている。この山地の西側斜面には多くの谷が形成され、これらの谷に集まつた水は、西流して山麓部に土砂を堆積させ扇状地を形成している。中垣内遺跡も鍋田川、大谷川により形成された扇状地の扇頂部から扇端部にかけて立地しており、そこはまた古代河内潟、河内湖の東縁部に位置する場所であった。

前述のように現在の大阪平野は、縄文時代中期に始まる海平面の上昇により海水域が深く入り込み、河内湾を形成していた。大東市においても市域の大半が水域に覆われて、生駒山地西麓付近を汀線として陸地を残すだけであったと考えられている。したがって、現在判明している中世以前の遺跡の大半がこの地域に集中して存在していることが理解できよう。このように大東市における遺跡の立地を考えるうえで、古代河内湾から河内潟、河内湖を経て現在に至るまでの大阪平野の地形の変遷が、深く関係しているのである。以下、地形との係わりをもって、時代順に大東市の主な遺跡を記述していく。

旧石器時代の遺跡としては、今のところ丘陵上の北条遺跡、宮谷古墳群で後期に属する有舌尖頭器の出土が知られているのみである。

縄文時代では、集落に関する遺構は検出されていないが、土器は出土している。平地の北新町遺跡では、奈良時代の自然河川から中期～後期、晩期末の土器が出土している他、丘陵上に立地している城ヶ谷遺跡で晩期末の船橋式の土器が、鍋田川によって形成された扇状地上に立地する鍋田川遺跡では早期末～晩期の土器が出土しており、上方からの流れ込みによるものであるが、山麓部の丘陵上に集落が存在していたことが推定される。

弥生時代では、前期では河内潟の水際に立地した中垣内遺跡、北条西遺跡、野崎条里遺跡などがあり、



第2図 大東市位置図

中期に入ると河内潟の中の低湿地上で一時的に特異な立地を見せる西諸福遺跡や、鍋田川遺跡、また中垣内遺跡でも前期から引き続き、この時期の遺構が確認されている。後期に入ると、丘陵部の各遺跡から土器が出土するようになり、立地の場所に変化がみられようになる。北条遺跡ではこの時期の堅穴住居跡が検出され、手焙型土器を出土している。

古墳時代になると大阪平野は、河内潟から河内湖となり、外海と完全に隔てられ、淡水湖となる。市域の大半は、前代と同様に水域に覆われていた。丘陵上には古墳が造営され、その麓の河内湖縁辺部では集落が営まれたようである。古墳に関しては、調査例が少ないため不明な点が多いが、市域では今のところ前期に属するものは確認されていない。中期に入ると三角板皮継短甲、衝角付冑、鉄刀、鐵鎌などをはじめとする多量の鉄製武器・武具類が出土した堂山1号墳が造営される。この古墳は標高約100mの尾根上にあり、径25mを測る円墳で、出土遺物の内容などから首長墓的性格の強い古墳であると考えられている。このほかに、円筒埴輪が採集された峯垣内古墳、また瓦堀寺院跡では堂山1号墳より遡る5世紀前半の円筒埴輪が採集されている。後期古墳では北条1～3号墳、多量の形象埴輪が出土し、横穴式石室を主体部にもつ宮谷1号墳、横穴式石室基底部が残存し、鉄刀、玉類などの副葬品が出土した城ヶ谷1・2号墳、円筒埴輪が10數本出土したと伝えられる六地蔵古墳のほか、群集墳では堂山古墳群、墓谷古墳群、宮谷古墳群、北条古墳群、守川古墳群、大谷古墳群などが知られており、後期に入ると数多くの古墳が造営されたことが推定される。集落に関しては、祭祀色の強い前期の中垣内遺跡、鍋田川遺跡があり、中期では倉庫群と推定される掘立柱建物が検出した北新町遺跡がある。また、鍋田川遺跡、北条遺跡、宮谷古墳群、メノコ遺跡、北新町遺跡、堂山下遺跡等で韓式土器、陶質土器、初期須恵器などが出土しており、渡来系の人々の活動が窺い知れる。

奈良時代～平安時代では各遺跡より遺物の出土をみると、具体的な遺構の検出例は少なく不明な点が多い。北新町遺跡では奈良時代の自然河川が検出され、そこから人面墨書き土器が出土している。

中世に入るとこの地域は、古代河内湖がそこへ流れ込む河川の堆積作用により徐々にその範囲を狭められ、勿入渕（広見池）と呼ばれる湖に姿を変え、そして、池の東縁には東高野街道が生駒山麓を南北に走るという水陸両交通の出会う重要な場所であった。この時代の遺跡は東高野街道沿いから湖までの間の低地上に立地していると考えられる。その代表的なものが北新町遺跡で、鎌倉時代の集落跡が広い範囲で検出されており、この時代の集落の景観を復元するに大変重要な遺跡である。また最近、北新町遺跡の西方に位置し、これまで遺物の採集はあたっものの、湖の中の低湿地と考えられていた御領遺跡でも、北新町遺跡より時期の下る鎌倉時代終わりから室町時代の集落跡が発見されている。この頃になると勿入渕も、河川の堆積作用などにより水深が浅くなり池の陸地化が進行し、このようにして形成された微高地に新たに集落が営まれたのであろう。他に同様な立地を示す遺跡には灰塚遺跡、灰塚堂田遺跡、西諸福遺跡などがある。また、この時代は各所で開墾、開発が行なわれたようで、丘陵部に立地する城ヶ谷遺跡でも開発の跡を残す段状遺構と杭列が検出されている。東高野街道以東の丘陵地には、遺構は検出していないものの、中世の遺物が各所に散布しており、開発が盛んに行なわれたことを物語っている。時代が少し下降して中世後半には、眼下に東高野街道と池を見下ろすという絶好の交通の要衝にあり、三好長慶の居城となった飯盛山城や宣教師ルイス・フロイス記述の「日本史」に登場する、キリスト教大名三箇サンチの居城であった三箇城が存在した。三箇城は池に形成された島に存在したと伝えられており、このことから、当時の池はさらに堆積作用が進行し、微高地から発達した島が池のあるちこちに点在していた光景が浮ぶ。残念ながら、今のところ三箇城に関連づけられる遺構・遺物は検出



- | | | | | | | |
|-----------|------------|------------|----------|--------------|----------|----------|
| ① 若宮遺跡 | ⑨ 奮闘遺跡 | ⑯ 福源寺古墳 | ㉔ 城の越古墳 | ㉚ 寺川遺跡 | ㉖ 飯盛山城跡 | ㉙ 桐谷古墳群 |
| ② 国見高地性遺跡 | ⑩ 福蓮寺遺跡 | ⑰ 北条西遺跡 | ㉛ 墓山古墳 | ㉜ 西諸福遺跡 | ㉚ 北条東古墳群 | ㉙ 御前遺跡 |
| ③ 七ヶ所古墳 | ⑪ メノコ遺跡 | ㉑ 宮谷古墳群 | ㉕ 墓山下古墳 | ㉝ 灰塚遺跡 | ㉚ 石切堀跡 | ㉙ 城ヶ谷遺跡 |
| ④ 中垣内遺跡 | ㉒ 墓垣内遺跡 | ㉓ 大将軍古墳 | ㉖ 墓山古墳群 | ㉞ 灰塚堂田遺跡 | ㉚ 野崎城跡 | ㉙ 寺川浜遺跡 |
| ⑤ 元粉廻路 | ㉔ 山寺川配水場古墳 | ㉔ 北条古墳 | ㉗ 六地藏古墳 | ㉞ 灰塚水道局淨水場遺跡 | ㉚ 北前町遺跡 | ㉙ 野崎余里遺跡 |
| ⑥ 鶴田川遺跡 | ㉕ 瓦堂遺跡 | ㉕ 北条南古墳 | ㉘ 十林寺古墳 | ㉚ 御供田遺跡 | ㉚ 大谷古墳群 | |
| ⑦ 太鼓山遺跡 | ㉖ やタ山古墳 | ㉖ 北条遺跡 | ㉙ 寺川古墳群 | ㉚ 三箇遺跡 | ㉚ 大坂城残石 | |
| ⑧ 亀岡ハシカ遺跡 | ㉗ 野崎遺跡 | ㉗ 城の越上の段古墳 | ㉚ 大谷神社古墳 | ㉚ 水野遺跡 | ㉚ 新田遺跡 | |

第3図 市内遺跡分布図

されていない。

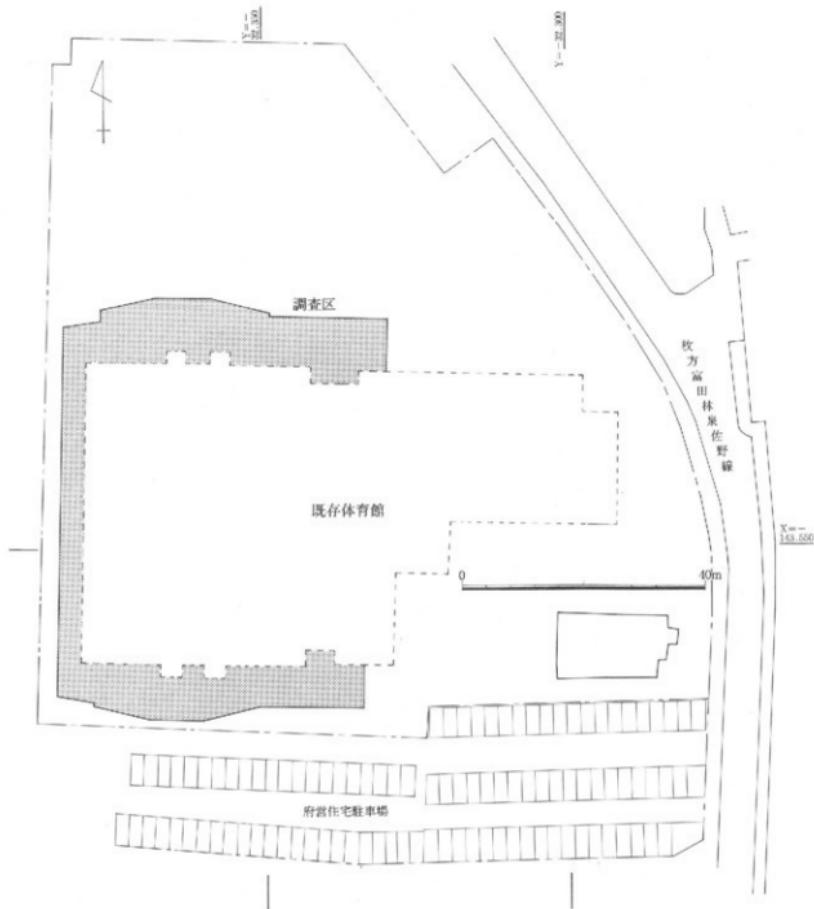
近世になると、池は深野池とその西方にある新開池となり、二つの池が形成され、池同士は、一本の川でつながっていた様子が古地図に描かれている。近世の遺跡としては、徳川家により元和六年（1620）から始まる、大坂城再築に伴う石垣用石採石場が、生駒山中の竈間に存在する。石切場跡遺跡や国見高地性遺跡がそれで、刻印石、矢穴石等が今も残っている。また、石の運搬経路であった、麓の中垣内1丁目には大坂城残石と呼ばれる巨石が存在するが、これにも石垣工事を請け負った諸藩の刻印がなされている。この場所は竈間山中で切り出され、谷筋を利用して麓まで運ばれた石を、ここから船に引かして、深野池、新開池を通り大坂城に運んだ中継地と考えられている。近世も中頃に入ると、宝永元年（1704）に大和川の付替え工事が行なわれ、これ以後古代河内湖の名残である深野池、新開池等の池沼は新田開発により陸地化が進み、ほぼ現在の大東市に近い姿になる。

参考文献

- 『大東市史』1973 大東市教育委員会
- 梶山彦太郎・市原実『大阪平野のおいたち』1986 青木書店
- 黒田淳『中垣内遺跡発掘調査報告書』1990 大東市教育委員会
- 中達健一・黒田淳『寺川・鍋田川遺跡発掘調査報告書』1991 大東市教育委員会
- 黒田淳「北条遺跡」「鍋田川遺跡」「宮谷古墳群」「韓式系土器研究II」1989 韓式系土器研究会
- 中達健一「大東市メノコ遺跡出土の韓式系土器」「韓式系土器研究IV」1993 韩式系土器研究会
- 宮野淳一『鍋田川遺跡発掘調査概要・I』1992 大阪府教育委員会
- 黒田淳『城ヶ谷遺跡発掘調査報告書』1990 大東市教育委員会
- 三宅正浩・黒田淳他『寺川・北条遺跡発掘調査報告書』1987 大東市教育委員会
- 田代克巳・瀬川健『堂山古墳群発掘調査概要』1973 大阪府教育委員会
- 三木弘編『堂山古墳群発掘調査概要』1994 大阪府教育委員会
- 『大東市北新町遺跡第1次発掘調査概要報告書』1986 大東市北新町遺跡調査会
- 『大東市北新町遺跡第2次発掘調査概要報告書』1991 大東市北新町遺跡調査会
- 中達健一『北新町遺跡発掘調査報告書』1994 大東市教育委員会
- 『平成7年度発掘調査速報展（御領遺跡）』1996 大東市立歴史民俗資料館
- 『近世大東の新田開発』1990 大東市立歴史民俗資料館
- 和田萃『河内の古道』『環境文化』第51号1981 財團法人環境文化研究所
- 日下雅義「第III章 第1節 第2項 歴史・地理的景観」『河内平野遺跡群の動態I』1987 財團法人大阪文化財センター

第3章 調査方法と調査区の地区割

調査方法は、まず調査区は、調査対象が基礎杭・地中梁を新たに設置される増築部分であるため、既存の建物を残した状態で、その周囲をコの字状に囲む形で設定した。（第4図）掘削方法は、試掘調査の結果に基づき、G L - 約1.5mまでの盛土・旧耕作土部分をバックホウによる機械掘削を行い、G L - 約2.6mの地山面まで人力掘削を行なった。記録作業は、從来の実測作業とクレーンによる空中写真測量との併用で図化を行い、実測作業時間の短縮化を図った。今回対象となった調査区は、ほぼ国土座



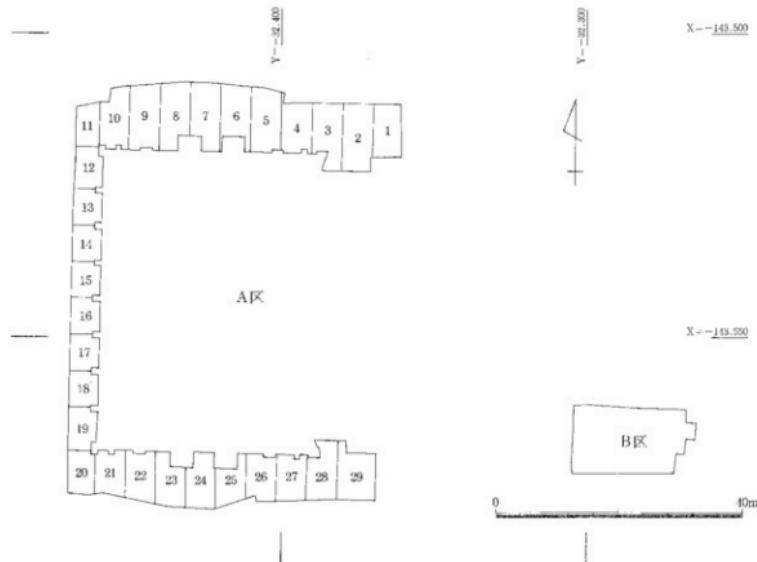
第4図 調査区配置図

標のメッシュに合致しており、測量等の基準については、国十座標第IV系をそのまま使用している。本米ならば地区割りについても、5~10m位のメッシュ単位をそのまま利用するべきではあるが、調査区の形がコの字状をしているため、独立した地区割りを設定した方が、現場での遺構、遺物の整理上都合が良い。したがって今回の調査では、大割りの区割り名称として、体育館増築部分をA区、浄化槽設置部分をB区として、さらにA区を1~29区に地区割りした。(第5図) 調査区名はA-1区等のように表示し、遺物の取り上げ、報告書の記述はこれにしたがっている。また、A区については、A-1~10区を一括して北側調査区と呼称し、以下同様にA-11~20区を西側調査区、A-21~29区を南側調査区として報告書内では記述している。

標高は、東京湾標準潮位(T. P.)を基準としてm単位で表示し、挿図中の方位記号は座標北を示している。また、X・Y座標値の単位もmで表示している。

本書で使用する遺構名については、アルファベットと数字の組合せで表記しており、アルファベットは遺構の種類を、数字は遺構番号を表している。本書で登場する遺構の種類については以下に示すところである。

S B	建物	S K	土坑
S D	溝	S N	畦畔
S E	井戸	S P	柱穴
S I	土器集積	S R	河川



第5図 調査区区割図

第4章 基本層序

基本層序は以下のとおりである。（第6図）

基本層序Ⅰ層

盛土、旧耕作土（床土を含む）から成る。盛土は、A区で層厚1.1～1.5m、B区で0.8～0.9mを測る。調査区の西側へ行く程層厚は厚い。盛土層は2層に分かれており、上層が既設の体育館建設時のもので、下層の0.1～0.2mが体育館建設以前の拘置所建設時のものと考えられる。拘置所建設以前の地表面である旧耕作土は、T. P+6.2～7.3m付近にあり、層厚0.1～0.2mを測る。A-22～28区を除いてほぼ全域で認められるが、拘置所建設時の擾乱の影響を強く受けしており、B区では削平のため認められなかつた。耕作を伴う灰色～灰黑色土を中心に形成された堆積で、時期的には近世～近代頃のものと考えられる。遺物は染付などの陶磁器類を主として瓦器椀、土師器皿などが含まれている。

基本層序Ⅱ層

第1遺構面のベース層で、A区で層厚0.1～0.5m、B区で0.15～0.2mを測るが、A-21～28区では拘置所建設時の削平のため認められなかつた。浅黄色～灰黄色、灰オリーブ色を呈し、A-1～9・29区のように細別できる場所もあるが、全体的には、多数の耕作痕（鋤溝）が連続して重なり合って観察されるため、分層は難しい。土質は粘土～粘質土で、洪水時に堆積したような砂層が認められてないので、安定した耕作地として利用されていたと考えられる。時期的には中世～近世初頭のものと考えられる。遺物は染付などの陶磁器類、瓦器椀、土師器皿の他、耕作によって掘り返された須恵器、土師器なども含まれている。

基本層序Ⅲ層

第2遺構面のベース層で、A-21～28区を除いて（21～28区ではⅢ・Ⅳ層が無いのでⅤ層をベース層としている）、ほぼ全域で認められる褐色系の粘質土である。細別すると2層に分けることができ、それぞれⅢa層、Ⅲb層とした。Ⅲa層は白色の砂粒を多く含む褐灰色粘土で、A-1～10・29区、B区で認められ、層厚0.15～0.2mを測る。Ⅲb層はシルト、細砂の混じる暗黄灰色粘質土でA-10～20区で認められ、層厚0.1mを測る。遺物は、古墳時代～奈良時代の須恵器、土師器などが割合多く含まれている。

基本層序Ⅳ層

A-1～4区で認められ、白色の砂粒を多く含む灰褐色～黒褐色粘土で、層厚0.1～0.25mを測る。次の第3遺構面で検出した建物跡を構成する柱穴の埋土になっている層である。

基本層序Ⅴ層

A-6～29区とB区で認められる層で、細別すると3層に分けることができ、それぞれⅤa層、Ⅴb層、Ⅴc層の順に堆積している。Ⅴa層は褐色系の粘質土で、水田跡と建物跡を検出した第3遺構面のベース層となっており、層厚0.15～0.3mを測り、調査区の西側へ行く程層厚は厚くなる。Ⅴb層は、層厚の薄い灰黄色中砂、シルト、黒色粘質土が縞状に堆積し、層厚0.1～0.4mを測り、調査区の西側、南側へ行く程層厚は厚くなる。Ⅴc層は植物遺体の混じる灰白色～黒灰色シルト混じり粘質土で、層厚0.1～0.25mを測る。B区では遺物は出土しておらず、A区では古墳時代の土師器、須恵器に混じって弥生時代中期～後期の土器が含まれている。

基本層序VI層

第4遺構面のベース層で、A-1区で東側断面において部分的に堆積が認められる以外は、調査区全体で認められる層であるが、調査区の西側へ行く程層厚は厚くなっている。層厚は0.1～0.5mを測る。上質は漸次変化していく状況で、A-1～4区では褐灰色粘土、A-6～12区では褐灰色シルト～灰黄色砂質土、A-12～29区では暗オリーブ灰色～緑灰色粘土となっている。A-6～12区で土質が砂質土となるのは、次の第5遺構面で検出した自然河川による氾濫の影響であると考えられる。A区では、大型柱状遺構、段状遺構、溝などを検出しており、B区では、灰黄色中砂の堆積する落ち込みを検出している。遺物は、A区では古墳時代の土師器、須恵器の他弥生土器が割合多く含まれるようになる。B区では、遺物は出土していないが、A区の第4遺構面に対応するものと考えた。

基本層序VII層

第5遺構面のベース層となっている層で、調査区全体で認められる暗灰色～黒色粘土である。層厚は、A区で0.2～0.3m、B区では最下層で認められる層で、東から西への斜面を形成している。A・B区で自然河川を検出しており、A区では弥生土器が出土している。

基本層序VIII層

A区で検出した最下層で、第6遺構面のベース層となっている層である。暗緑灰色～暗青灰色粘土で、下層のほうは砂質土となっている。この層の上面の遺構から縄文土器が出土している他は、遺物は出土しておらず、地山と考えた。

第5章 調査成果

第1節 第1遺構面の遺構と遺物

第1遺構面は、基本層序II層をベース層として検出している。検出面は、A-1~10区でT.P.+6.9~6.0m、A-11~20区でT.P.+5.9~6.2m、A-21~29区でT.P.+6.2~6.5mを測る。また、B区では東側でT.P.+7.4mを測り、西側ではT.P.+7.3mを測る。調査区全体で北東から南西方向への傾斜が認められる。遺構は、溝、土坑、ピットなどを検出しているが、遺構からの出土遺物の量は少ない。検出した溝は水路と考えられ、出土遺物から第1遺構面は近世以降の時期と考えられる。

1. 遺構（付図1）

A区

SD-04（図版3）

A-20~23、26~29区で検出した東西方向に直線に走る溝で、後世の削平の影響を受けて途切れつつも、南側調査区全体で認められる。幅0.64~0.9m、深さ0.16~0.3mを測る。堆積土は灰オリーブ色粘質土である。この溝はさらに東へと続いており、B区でも検出している。遺物は、陶磁器類に混じって瓦器碗、須恵器、土師器片などが少量出土しているにすぎない。

SD-05

A-19区で検出した東西方向に直線に走る溝で、検出長約2.0m、幅0.64~0.8m、深さ0.16~0.3mを測る。堆積土は、上層が灰オリーブ色粘質土で、下層が灰色砂混じり土の2層である。遺物は出土していない。

SD-06

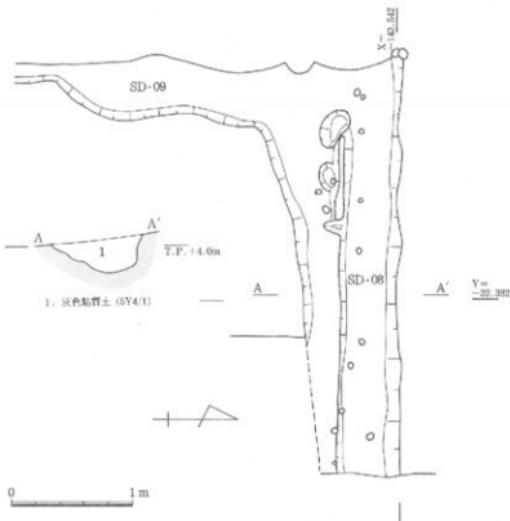
A-26区で検出した南北方向に直線に走る溝で、検出長約0.7m、幅0.42~0.5m、深さ0.04~0.08mを測る。堆積土は、オリーブ灰色粘質土である。土製人形の小片が出土している。

SD-07

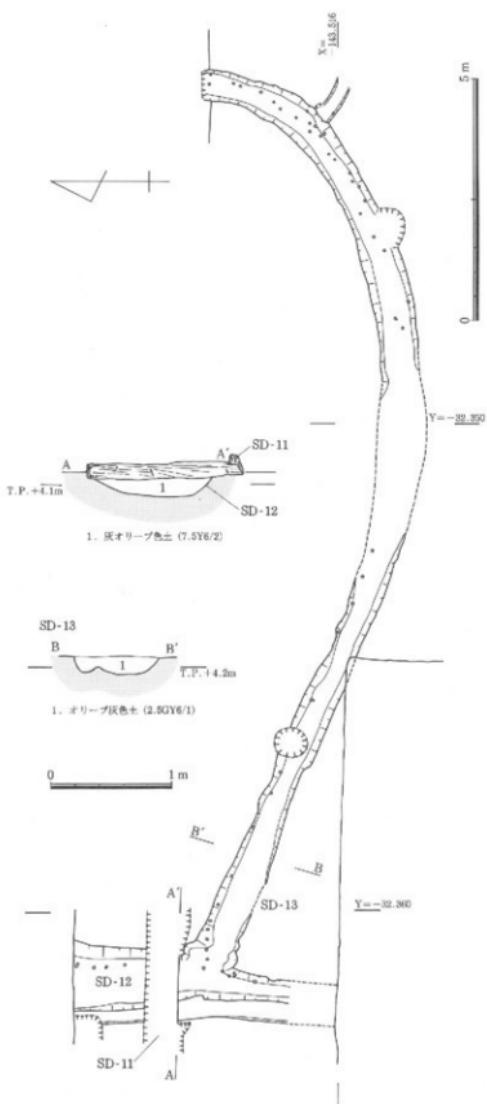
A-18区で検出した南北方向に直線に走る溝で、検出長約4.2m、幅0.24~0.72m、深さ0.02~0.15mを測る。堆積土は、緑灰色粘質土である。遺物は、瓦器碗片、土師器片が出土している。

SD-08（第7図）

A-15区で検出した東西方向に直線に走る溝で、検出長約3.0m、幅0.64~1.1m、深さ0.21~0.3mを測る。遺物は、陶磁器類の他瓦



第7図 SD-08・09平面図



第8図 SD-12・13平面図

器碗片、土師器片が出土している。

SD-09(第7図、図版3)

A-15~17区で検出した南北方向に直線に走る溝で、検出長約7.8m、幅0.16~0.7m、深さ0.~0.18mを測る。北端はSD-08に合流し、南へは、側溝によって西側のほとんどの部分を切られているが、A-19・20区付近まで続いている。SD-04に合流しているものと考えられる。堆積土は、SD-08と同じ灰色粘質土である。遺物は、側溝掘り下げ時に出土した染付、土製品などがある。

SD-10

A-12区で検出した東西方向に直線に走る溝で、検出長約2.2m、幅0.48~0.84m、深さ0.17~0.19mを測る。堆積土は、オリーブ灰色土である。遺物は、出土していない。

SD-11

A-5~10区で検出した東西方向に直線に走る溝で、SD-12を切っている。検出長約31.1m、幅0.52~0.88m、深さ0.07~0.28mを測る。両側に杭を打ち板柵をしており、堆積土は灰黒色土である。陶磁器類、瓦器、土師器、須恵器、弥生土器片などの遺物に混じってガラス片が含まれることから、近代(既設体育館建設時)まで使用されていた水路であると考えられる。

SD-12(第8図、図版2)

A-7区で検出した南北方向に直線に走る溝で、検出長約4.5m、幅0.88~1.6m、深さ0.18~0.32mを測る。SD-11に切られている。陶磁器類の他瓦器、土師器、須恵器片が出土している。

SD-13 (第8図、図版2)

A-3~7区で検出している。SD-12より分岐して東南東方向に向かい、5区で湾曲しながら東北東方向に向きを変え、3区では北に向きを変え調査区外へと続いている溝である。検出長約18.3m、幅0.52~0.86m、深さ0.02~0.19mを測る。遺物は、陶器片が出土している。

SD-14 (第9図、図版2)

A-1~2区で検出した東西方向に直線に走る溝である。検出長約6.6m、幅0.74~1.16m、深さ0.03~0.2mを測る。遺物は、陶磁器類の他に瓦器片、土師器片が出土している。

SD-37 (第9図、図版2)

A-1~2区で検出した南東~北西方向に直線に走る溝で、SD-14に合流する。検出長約3.0m、幅0.12~0.3m、深さ0.03~0.04mを測る。堆積土はSD-14と同じオリーブ灰色土である。遺物は、出土していない。

SD-38

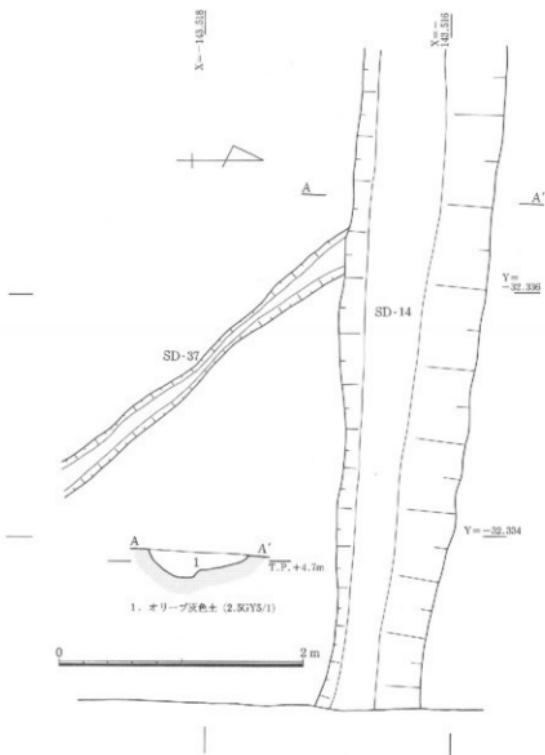
A-3区で検出した南東~北西方向に直線に走る溝で、検出長約0.92m、幅0.32m、深さ0.06~0.07mを測り、途中で切れている。SD-13と合流する。堆積土は、SD-13と同じオリーブ灰色土である。遺物は、出土していない。

SD-39

A-5区で検出した南北方向に直線に走る溝である。削平によって消滅しており、杭列だけが残存する。SD-13に合流していたと考えられる。

SD-40

A-22区で検出した南北方向に直線に走る溝で、検出長約0.92m、幅0.22~0.28m、深さ0.02~0.09mを測る。南端はSD-04に合流し、北端は調査区外へと続いている。堆積土は、灰オリーブ色粘質土である。遺物は、出土していない。



第9図 SD-14・37平面図

S D - 41

A - 22区で検出した南北方向に直線に走る溝で、検出長約0.38m、幅0.14m、深さ0.01~0.02mを測る。南端は舌状に終わり、北端は調査区外へと続いている。堆積土は、灰オリーブ色粘質土である。遺物は、出土していない。

S D - 42

A - 26区で検出した南北方向に直線に走る溝で、検出長約2.44m、幅0.13~0.23m、深さ0.03~0.11mを測る。北端は S D - 04に合流し、南端は調査区外へと続いている。堆積土は、灰オリーブ色粘質土である。遺物は、出土していない。

S K - 03

A - 15区で検出した。規模は1.1×0.8m、深さ約0.23mを測り、一辺が突出する隅丸方形を呈する。堆積土は、灰色土である。瓦器片、土師器片が出土しており、遺構の底には板材が敷かれてあった。

S K - 04

A - 16区で検出した。規模は0.44×0.5m、深さ約0.15mを測り、不整な円形を呈する。堆積土は、灰色粘質土である。遺物は、出土していない。

ピット（第1表）

A区の南側調査区で集中して検出しているが建物を復元するまでには至らなかった。柱根は残存しておらず、建物の柱穴かどうかは不明である。

第1表 A区第1遺構面ピット一覧表

番号	地区	形状	平面規模(m)	深さ(m)	備考
S P - 15	A - 26	不定形	0.30×0.40	0.05	
S P - 16	A - 26	椭円形	0.26×0.29	0.25	
S P - 17	A - 26	不定形	0.59×0.46	0.16	
S P - 18	A - 26	不定形	0.42×0.44	0.22	
S P - 19	A - 24	不定形	0.24×0.26	0.05	SP - 20に切られている
S P - 20	A - 24	不定形	0.22×0.38	0.11	SP - 19を切っている
S P - 21	A - 24	不定形	0.28×0.32	0.10	SP - 22に切られている
S P - 22	A - 24	不定形	0.24×0.32	0.11	SP - 21を切っている
S P - 23	A - 24	円形	0.22×0.22	0.08	
S P - 24	A - 24	隅丸方形	0.26×0.28	0.22	
S P - 25	A - 23	不定形	0.38×0.24	0.03	側溝により切られている
S P - 26	A - 23	不定形	0.24×0.34	0.07	側溝により切られている
S P - 27	A - 23	不定形	0.30×0.28	0.07	
S P - 28	A - 23	椭円形	0.38×0.30	0.10	
S P - 29	A - 23	不定形	0.20×0.20	0.05	
S P - 30	A - 23	椭円形	0.22×0.28	0.02	
S P - 31	A - 23	不定形	0.36×0.38	0.40	
S P - 32	A - 23	不定形	0.48×0.36	0.10	
S P - 33	A - 22	隅丸方形	0.27×0.27	0.26	
S P - 34	A - 19	円形	0.24×0.25	0.30	

B区

SD-04

調査区の南側端で検出している。削平のため、杭と石が残存するのみであったが、杭の並び方から東西方向に走る溝が存在したと推定された。この溝は、検出位置と方向から、A区で検出したSD-04が続いていたものと考えられる。

2. 遺物（第10・11図、図版18・19・27）

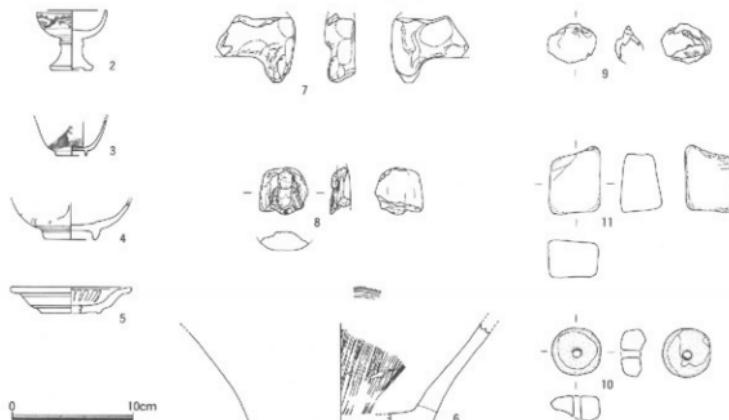
第1遺構面での出土遺物は近世のものが中心で、水路内より染付などが出土しているが、図化し得るものは少なかった。ここでは、溝からの出土遺物と第1遺構面のベース層を構成しているII・III層上面で出土した遺物を中心紹介する。

1～5は、SD-09出土遺物。1は染付けの蓋付き重（段重）である。蓋は完形品で口径19.1cm、器高6.4cmを測り、身は約1/2が欠損しており、口径18.2cm、器高5.3cmを測る。蓋身とともに全体に牡丹花文が施され「福寿」の字を配している。2は伊万里焼染付けの仏飯具で杯部外面に蛸唐草文を施す。高台はヘラケズリによる調整で、砂目である。口径5.8cm、器高5.05cm、高台径3.2cmを測る。3は伊万里焼き染付小碗で、器壁は薄く外面に風景文を施す。高台径2.4cmを測る。用途は酒杯か。4は伊万里焼染付け碗で、見込みに蛇の目割ぎ、高台は砂目高台である。文様は草花文か。高台径4.2cmを測る。5は美濃焼菊皿である。口径10.0cm、器高2.2cm、高台径4.8cmを測る。6は陶製掘り鉢で底径15.0cmを測る。7～9は土製のミニチュア品で、7は動物の脚の一部で頭部と前脚部を欠く。型づくり成形で合わせめ未調整。SD-09からの出土で、土馬か。8は阿弥陀如来座像で型づくり成形。9は土鈴である。10は土製紡錘車、径3.9



第10図 第1遺構面出土遺物（1）

cm、中央に径約7mmの孔がある。11は砂岩製底石である。



第11図 第1遺構面出土遺物（2）

第2節 第2遺構面の遺構と遺物

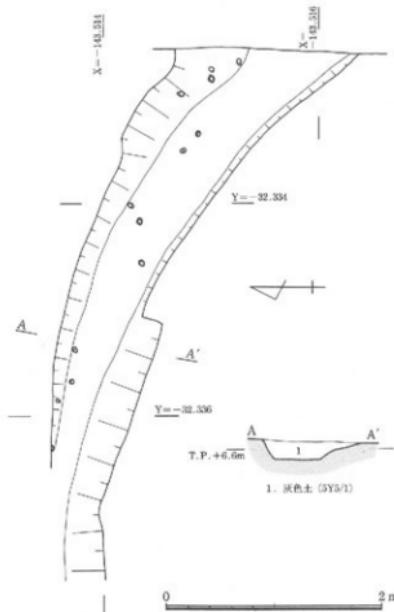
第2遺構面は、基本層序Ⅲ層をベース層として（A-21~28区では、基本層序Ⅳ層がベース層）検出している。検出面は、A-1~10区でT.P.+6.7~5.9m、A-11~20区でT.P.+5.8~6.0m、A-21~29区でT.P.+6.1~6.4mを測り、B区では第1遺構面とほぼ同一高であった。調査区全体で北東から南西方向への傾斜が認められる。遺構は、A-1~7区で杭列を伴う溝（水路）2条とピットを検出しているのみである。

1. 遺構（付図2）

A区

SD-15（第12図、図版4）

A-5~7区で検出している。A-5区で湾曲しながら南北方向から東西方向に向きを変え走る溝で、西端は、第1遺構面で検出したSD-12で終わっている。検出長約11.3m、幅0.52~0.8m、深さ0.15~0.2mを測る。杭列を伴い、調査区の南側へさらに続くものと思われる。



第12図 SD-16平面図

遺物は、陶磁器類に混じって須恵器、土師器、瓦器、甕生土器片などが出土している。

S D - 16 (第13図、図版4)

A - 1 ~ 2 区で検出しており、わずかに湾曲しながら東南東～西北西に走る溝である。検出長約5.3m、幅0.65~1.0m、深さ0.12~0.2mを測る。杭跡が認められる。遺物は、陶磁器類の他須恵器、瓦器片が出土している。

ピット (第2表)

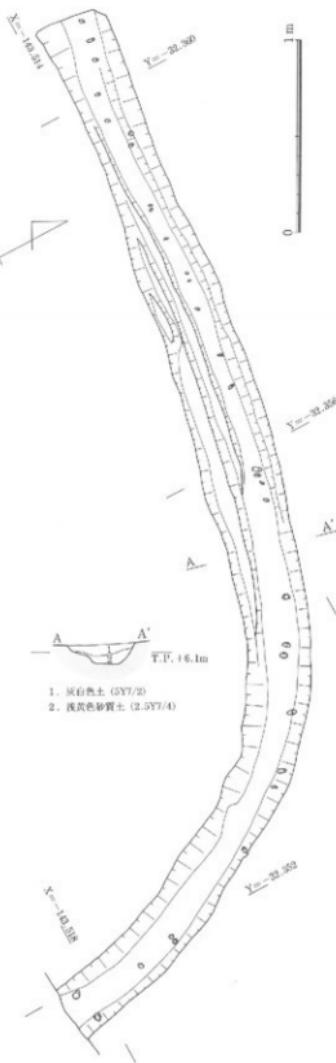
S D - 16周辺で集中して検出しているが、建物を復元するまでには至らなかった。柱根は、残存しておらず、建物に伴う柱穴ではないようである。

B 区

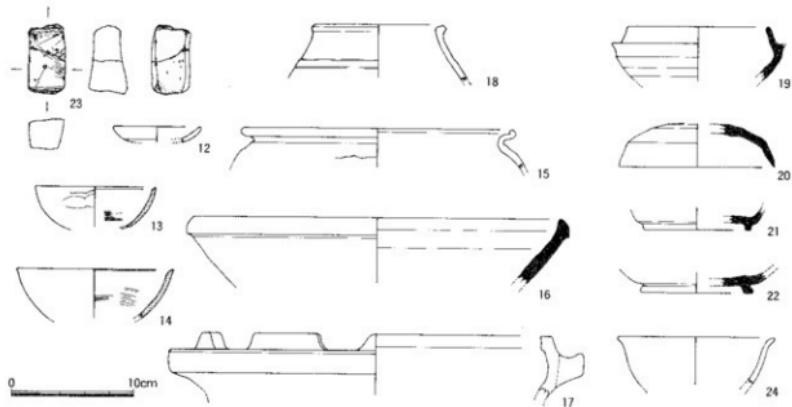
若干の耕作痕（鋤溝）が認められるだけで、遺構は、検出されなかった。遺物は、陶磁器や瓦器、須恵器片が少量出土しているのみである。

2. 遺物 (第14・15図、図版18・19・20・27)

遺構からの出土遺物は少なく、第2遺構面のベース層を構成するII~IV層の出土遺物である。12は土師器皿で、口縁部内外面ともヨコナデを施している。口径7.0cm、器高1.3cmを測る。13は瓦器碗である。口径約9.9cmと小型のもので、瓦器碗が衰退化に向かう13世紀末～14世紀前半頃の様相を示す。14は桶形型の瓦器碗で、口径12.7cmを測る。13世紀後半頃のものか。12~14はいづれもIIIa層からの出土。15は羽釜の口縁部で、鍔は欠失している。口径22.0cmを測り、口縁部は「く」の字状に外反し、端部は内側へ折り返す。14世紀前半頃に属する。II層からの出土。16は東播系須恵器片口鉢である。口径30.0cmを測り、口縁部は玉縁状に肥厚し端部は上方やや内側に向かって伸びる。形態的には14世紀前半頃に属する。17は瓦質の羽釜で口径34.0cmを測る。器壁は厚く、短い頑丈な鍔を有し、口縁部に湾曲状抉り込みがある。外面に煤が付着する。18は須恵質の壺口縁部で口径10.6cmを測る。20は須恵器杯蓋で口径12.7cm、器高3.5cmを測る。後は認められず、天井部の約1/2に回転ヘラケズギが施されている。中村浩編年(1)のII型式3段階(以下、II-3のように型式・段階を略す)に属する。19・21・22は杯身で



第13図 SD - 15平面図



第14図 第2遺構面出土遺物

ある。19は口径11.5cmを測り、口縁部は短いたちあがりが内傾気味にたちあがる。端部は磨耗しているが内傾する面を持つ。II-1に属する。21は断面四角形の高台がやや内側に向かって付く。高台径8.7cmを測る。IV-3~4に属する。22は断面台形の高台が外側に向かってハの字状に付く。高台径8.7cmを測る。IV-2~3に属する。23は砥石で両面ともよく使い込んでいる。長さ5.7cm、幅3.1cm、厚さ2.0cmを測る。石材は砂岩製。24は青磁碗で、B区のII層からの出土。25は銅錢で、1部欠損しているが順読、篆書体で「元〇〇宝」の字が読みとれる。北宋錢の「元豐通寶」（1078初鑄）「元祐通寶」（1086初鑄）、「元符通寶」（1098初鑄）のうちのいづれかである。但し、篆書体の「元豐通寶」は「宝」の字の「宀」が長いのが特徴でこれには該当しないと考えられる。

第15図 出土銭貨

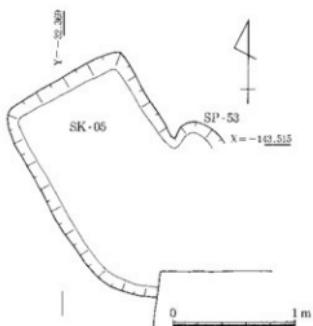


第2表 A区第2遺構面ピット一覧表

番号	地区	形状	平面規模(m)	深さ(m)	備考
S P-35	A-2	隅丸方形	0.13×0.14	0.20	
S P-36	A-2	隅丸方形	0.19×0.32	0.34	
S P-37	A-2	隅丸方形	0.12×0.19	0.35	
S P-38	A-2	隅丸方形	0.17×0.20	0.36	
S P-39	A-2	隅丸方形	0.20×0.27	0.26	
S P-40	A-2	隅丸方形	0.19×0.20	0.34	

第3節 第3遺構面の遺構と遺物

第3遺構面は、基本層序V層をベース層として検出している。検出面は、A-1~10区でT.P.+6.6~5.6m、A-11~20区でT.P.+5.6~5.7m、A-21~29区でT.P.+5.6~6.1mを測り、B区では東側でT.P.+7.3m、西側でT.P.+7.0mを測る。調査区全体で北東から南北方向への傾斜が認められ、遺構はA区で建物跡、水田跡、土坑をB区で溝、ピット、土坑などを検出している。



第16図 SK-05平面図

第3表 A区第3遺構面ピット一覧表

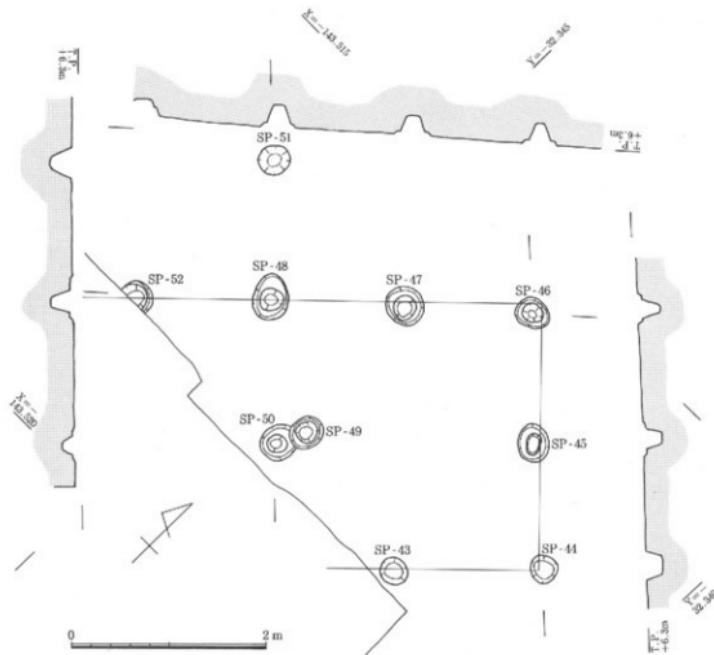
番号	地区	形状	平面規模(m)	深さ(m)	備考
S P-41	A-3	円形	0.24×0.28	0.23	
S P-42	A-3	円形	0.22×0.24	0.23	
S P-43	A-3	円形	0.28×0.30	0.25	
S P-44	A-3	円形	0.28×0.28	0.19	
S P-45	A-3	椭円形	0.34×0.39	0.20	
S P-46	A-3	椭円形	0.30×0.38	0.23	
S P-47	A-3	円形	0.38×0.40	0.21	
S P-48	A-4	長円形	0.36×0.48	0.23	
S P-49	A-3	椭円形	0.30×0.36	0.13	SP-50を切っている
S P-50	A-3	椭円形?	0.35×0.40	0.13	SP-49に切られている
S P-51	A-4	円形	0.30×0.32	0.23	
S P-52	A-4	円形?	0.34×0.34	0.36	
S P-53	A-8	円形?	0.40×0.40	0.10	

第4表 A区第3遺構面畦畔一覧表

番号	地区	形状	平面規模(m)	高さ(m)	備考
S N-01	A-12~14	南北	0.3~0.9×4.5	0.03~0.05	
S N-02	A-13	東西	0.58×2.75	0.03~0.04	
S N-03	A-14	東西	0.38×3.42	0.02~0.04	
S N-04	A-13	東西	0.5~1.64×3.58	0.02~0.04	
S N-05	A-16	南北	0.45~0.59×1.85	0.02~0.03	
S N-06	A-16	南北	0.35×1.45	0.02~0.03	
S N-07	A-16	東西	0.42~0.58×3.38	0.03~0.05	

第5表 B区第3遺構面ピット一覧表

番号	地区	形状	平面規模(m)	深さ(m)	備考
S P - 01	B	不定形	0.22×0.16	0.01	
S P - 02	B	不定形	0.42×0.30	0.13	
S P - 03	B	円形	0.16×0.18	0.04	
S P - 04	B	隅丸方形	0.32×0.34	0.20	
S P - 05	B	不定形	0.26×0.18	0.04	
S P - 06	B	不定形	0.24×0.20	0.08	
S P - 07	B	隅丸方形	0.22×0.16	0.11	
S P - 08	B	不定形	0.36×0.38	0.04	
S P - 09	B	不定形	0.16×0.12	0.02	
S P - 10	B	不定形	0.16×0.24	0.04	
S P - 11	B	不定形	0.60×0.28	0.12	
S P - 12	B	椭円形	0.36×0.32	0.03	
S P - 13	B	不定形	0.42×0.34	0.09	
S P - 14	B	不定形	0.29×0.24	0.12	



第17図 S B - 01平面図

1. 遺構（付図3）

A区

SK-05（第16図）

A-8区で検出した。規模は1.3×1.9m、深さ0.08～0.12mを測り、隅丸長方形を呈する。堆積土は灰褐色砂混じり粘質土である。遺物は、須恵器、土師器片に混じって弥生土器が出土がしている。

SB-01（第17図、図版5）

A-2～3区で検出した推定で3間×2間の掘立柱建物である。桁行4.05m、梁行2.65mで建物の主軸はN-43°～Eを示す。柱穴の規模は径0.3～0.4m程度で、深さは0.12～0.23mを測る。

ピット（第3表）

その他のピットは一覧表に示すとおりである。

水田跡（第18図、第4表、図版6）

A-12～17区で、畦畔と足跡を検出した。調査範囲が限られたため、水田の区画を完全に検出することはできなかったが、推定で一边が約4～5mの小区画の水田であろう。畦畔の残存状況は奈良時代以降の削平の影響を受けて良くない。水田面の直上には、洪水砂と考えられる細砂～シルトが薄く堆積しており、それが足跡の埋土となっていた。A-18～29区では畦畔と足跡は検出されておらず、洪水砂と考えられる中砂が0.3～0.4m程堆積しており、その下層には、植物遺体が混じる滯水性の粘土の堆積が認められることから、水田が営まれていた時期以降の一時的期間は、湿地のような状態であったことが考えられる。なお、検出した畦畔は一覧表に示すとおりである。

B区（第19図、図版16）

SD-01

調査区の中央で検出したほぼ南北方向に直線に走る溝で、検出長4.7m、幅0.38m、深さ0.05m、を測る。堆積土は、暗灰黄色土で、遺物は、出土していない。

SD-02

調査区の西側で検出した逆L字状に走る溝である。東西方向の検出長1.3m、南北方向の検出長6.1mで、幅約0.35m、深さ0.05mを測る。堆積土は、暗灰黄色土である。南北方向はSK-01に切られている。



第18図 A-12～17区水田跡平面図



第19図 B区第3遺構面平面図

SK-01

調査区の西側で検出した不定形の土坑で、規模は $1.29 \times 1.34\text{m}$ 、深さ 0.54m を測り、SD-02を切っている。堆積土は、暗灰黄色砂混じり粘質土で、底に灰色砂が薄く堆積していた。遺物は、土師器の把手、須恵器杯蓋片が出土している。

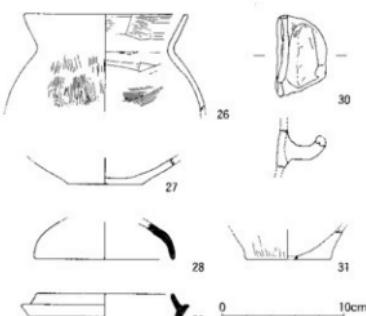
ピット（第5表）

柱根の残存するものではなく、建物に伴う柱穴ではなさそうである。

2. 遺物（第20図、図版20・21）

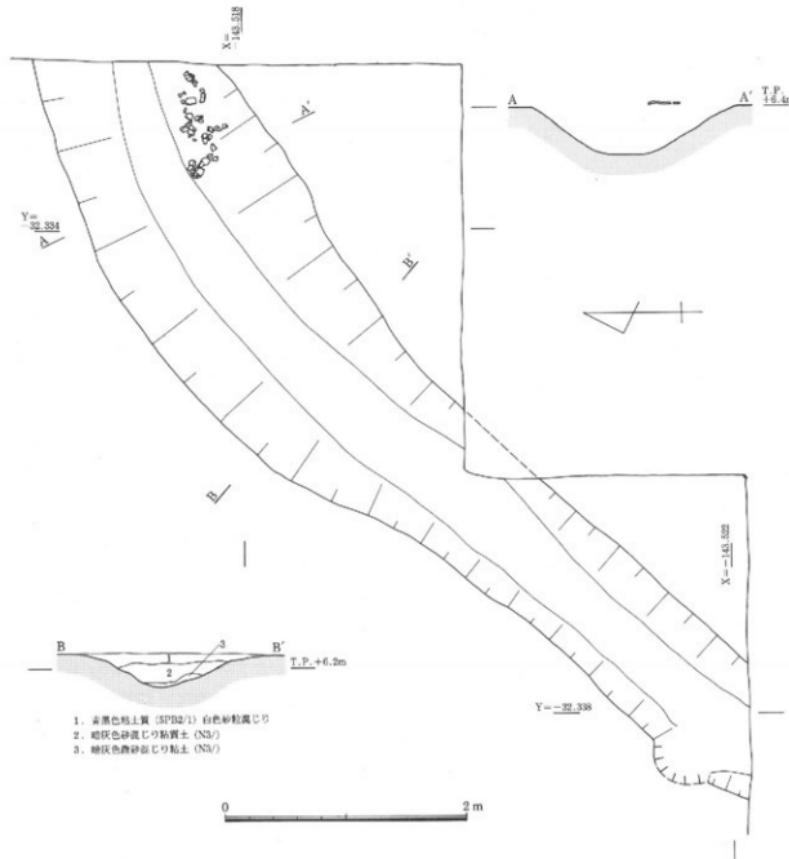
第3遺構面でも遺構からの出土遺物は少なく、遺構面のベース層となっている包含層から古墳時代後半の須恵器、土師器、弥生土器等が出土しているが、いづれも小片ばかりで図示し得たものは少ない。26は土師器甕で、口径 13.3cm を測る。体部外面にタテ方向のハケメ、内面はヘラケズリと不定方向のハケメがかすかに認められる。表面には煤が付着する。27は弥生土器底部で、調整は不明。底径 5.8cm を測る。いづれもIIIa層からの出土。B区ではSD-02で囲まれた一段低い部分（IIIa・IV層に相当）から6世紀後半に属する須恵器杯蓋（28）、杯身（29）が出土している。28は口径 11.6cm を測り、天井部と口縁部の間に稜は認められない。29は口径 11.2cm を測り、たちあがりはやや短く内傾している。いづれもII-4に属する。30は土師器の把手片でSK-01からの出土。31は弥生土器底部。

第20図 第3遺構面出土遺物

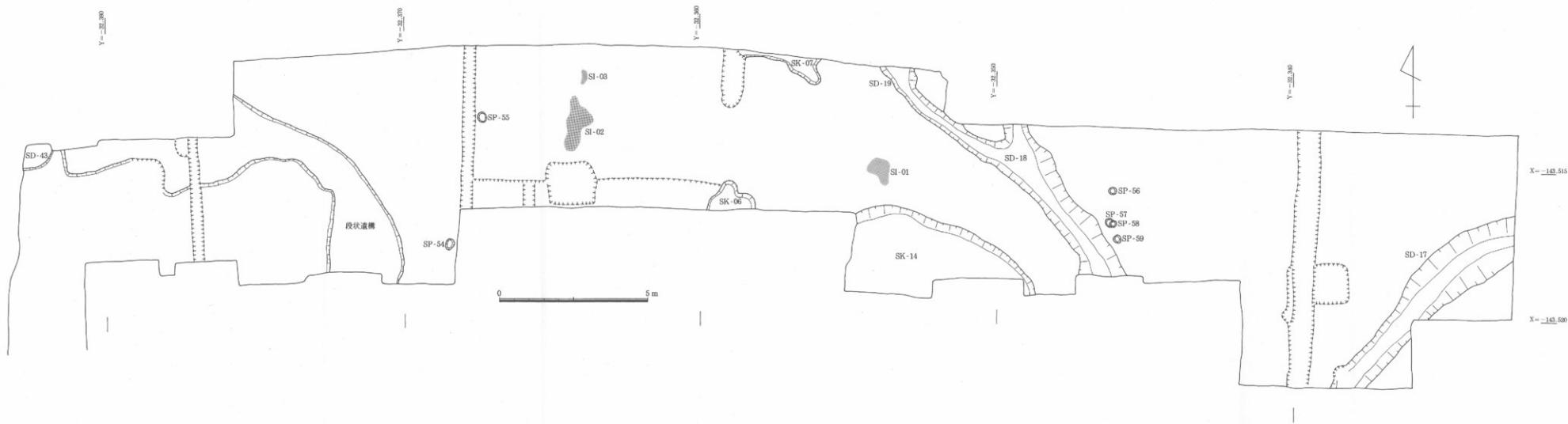


第4節 第4遺構面の遺構と遺物

第4遺構面は、基本層序VI層をベース層として検出している。検出面は、A-1~10区でT.P.+6.5~5.4m、A-11~20区でT.P.+約5.4m、A-21~29区でT.P.+5.4~5.9mを測り、B区では東側でT.P.+7.1m、西側でT.P.+5.8mを測る。調査区全体で北東から南西方向への傾斜が認められる。遺構は、A区で大型畦畔、段状遺構、溝、土器群、自然河川、B区で自然河川、土坑等検出している。しかし、遺構からの出土遺物は少量であるため所属時期を明らかにし得ないが、SD-17が古墳時代前期で、それ以外は、弥生時代後期~古墳時代前期であると考えられる。



第21図 SD-17平面図



第22図 A-1~11区第4遺構面平面図



1. 遺構（付図4）

A区（第22図）

SD-17（第21図、図版7）

A-1～2区で検出した北東から南西方向に走る溝で、検出長約7.8m、幅0.98～1.82m、深さ0.23～0.39mを測る。最上層で古墳時代前期の土師器壺がまとまって出土しているが、溝からの出土遺物と判断すべきかどうかわからない。出土状況から推定すると壺の存在した位置は、溝がほぼ埋まった後と考えられ、溝の所属時期を示しているかどうか疑問が残る。

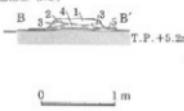
SD-18（図版8）

A-3区で検出した北西から南東方向に走る溝で、途中でSD-19を分岐する。検出長約6.0m、幅0.8～1.56m、深さ0.32～0.42mを測る。堆積土は、オリーブ灰色～灰白色のシルト～粗砂で、自然流路の堆積の様相をしめている。SD-19との切り合い関係はない。遺物は、古墳時代前期の土師器に混じって、弥生土器片が出土している。

SD-19（図版8）

A-3～4区で検出した北西から南東方向に走る溝で、SD-18に合流する。検出長約4.9m、幅0.46～1.12m、深さ0.37～0.4mを測る。堆積土は、灰色～浅黄色の細砂～粗砂で自然流路の堆積の様相をしめている。遺物は、古墳時代前期土師器、弥生土器片が出土している。

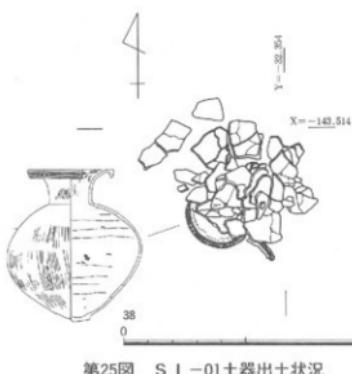
1. オリーブ灰色粘土 (10Y5/2) 鉄鏽有り
2. オリーブ灰色シルト・粘土 (10Y5/2)
3. 黒オリーブ灰色砂質粘土 (2.3GY4/1)
4. 黒オリーブ灰色粘土 (2.3GY4/1)
5. 灰色粘土 (NA/1)



砂～粗砂で自然流路の堆積の様相をしめている。遺物は、古墳時代前期土師器、弥生土器片が出土している。

SD-43

A-11区で検出した南北方向に走ると考えられる溝である。検出長約0.66m、幅0.4～0.66m、深さ0.05mを測る。堆積土は、灰色細砂である。遺物は、出土していない。自然流路と考えられる。



S K - 06 (図版8)

A - 4 ~ 6区南側で検出した不定形の土坑で、検出規模 $2.9 \times 6.2\text{m}$ 、深さ $0.29\sim 0.37\text{m}$ を測る。堆積土は、上層から緑黒色砂混じり粘土、灰色砂混じり粘質土、灰色砂質土、灰色粘質土である。遺物は、古墳時代前期の土師器に混じって弥生土器片が出土している。

S N - 08 (第23図、図版10)

A - 12区で検出した東西方向に走る大型畦畔で、検出長 3.46m 、幅 $0.94\sim 1.4\text{m}$ 、高さ $0.09\sim 0.17\text{m}$ を測る。南側の縁に沿って木質が残っている。

S N - 09 (第24図、図版10・11)

A - 18、22~25区で検出した北西から南東方向に走る大型畦畔である。A - 18区で検出長 5.1m 、幅 1.5m 、高さ $0.2\sim 0.3\text{m}$ 、A - 22~25区で検出長 13.8m 、幅 1.7m 、高さ $0.2\sim 0.25\text{m}$ を測る。

土器群 (第25図、図版8)

S I - 01

A - 5区で検出した土器群で、弥生時代後期の大型壺がほぼ1個体破碎された状態で出土しているが、これに伴う遺構は検出されなかった。

S I - 02 (第26図、図版9)

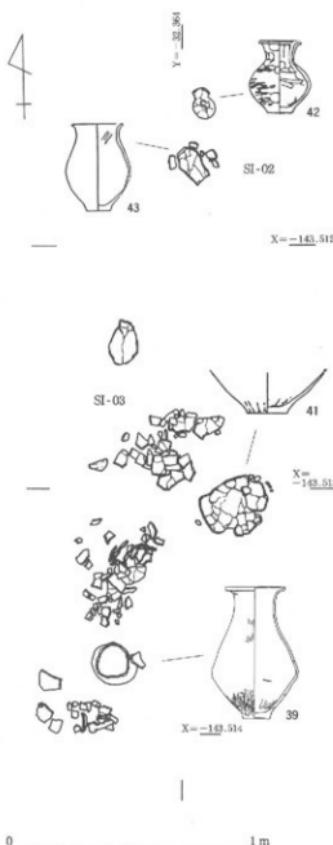
A - 7区で検出しており、弥生時代後期の小型の壺が出土している。遺構は伴わない。

S I - 03 (第26図、図版9)

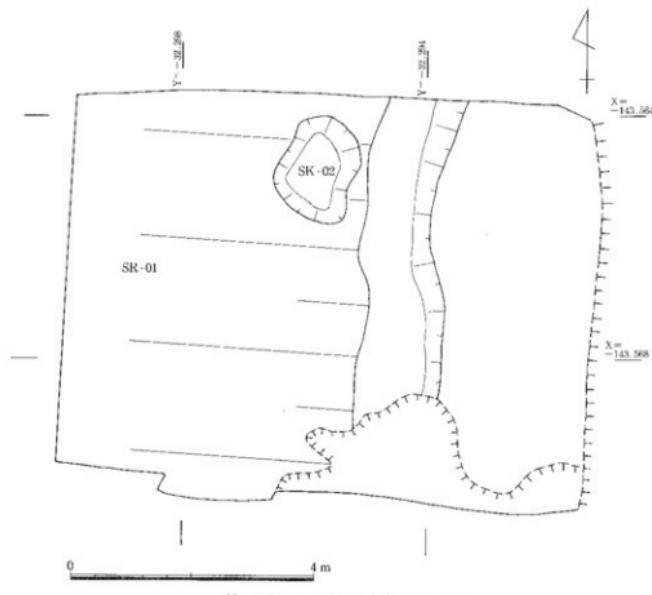
A - 7区で検出しており、弥生時代後期の壺が3~

S K - 07

A - 6区北側で検出した不定形の土坑で、検出規模 $0.89 \times 3.0\text{m}$ 、深さ 0.17m を測る。堆積土は、灰色砂質土である。遺物は、出土していない。



第26図 S I - 02・03土器出土状況



第27図 B区第4遺構面平面図

の水性堆積層が認められる。

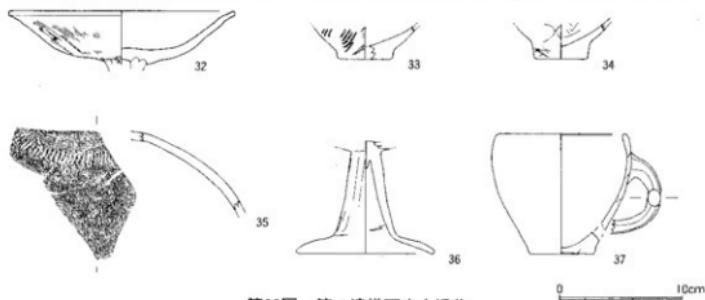
ピット（第6表）

全部で6基検出しているが、建物に伴うものではないようである。

B区（第27図、図版16）

S R - 01

調査区全体で検出した東から西へ向かう落ち込みで、検出長7.1m、検出幅5.85m、深さ0.94mを測る。東から西に傾斜する自然地形とも考えられたが、直上の堆積土が粗砂を含むシルトで河川内の埋土に類似していたので、ここでは自然河川の一部を検出したと考えた。遺物は、出土していない。

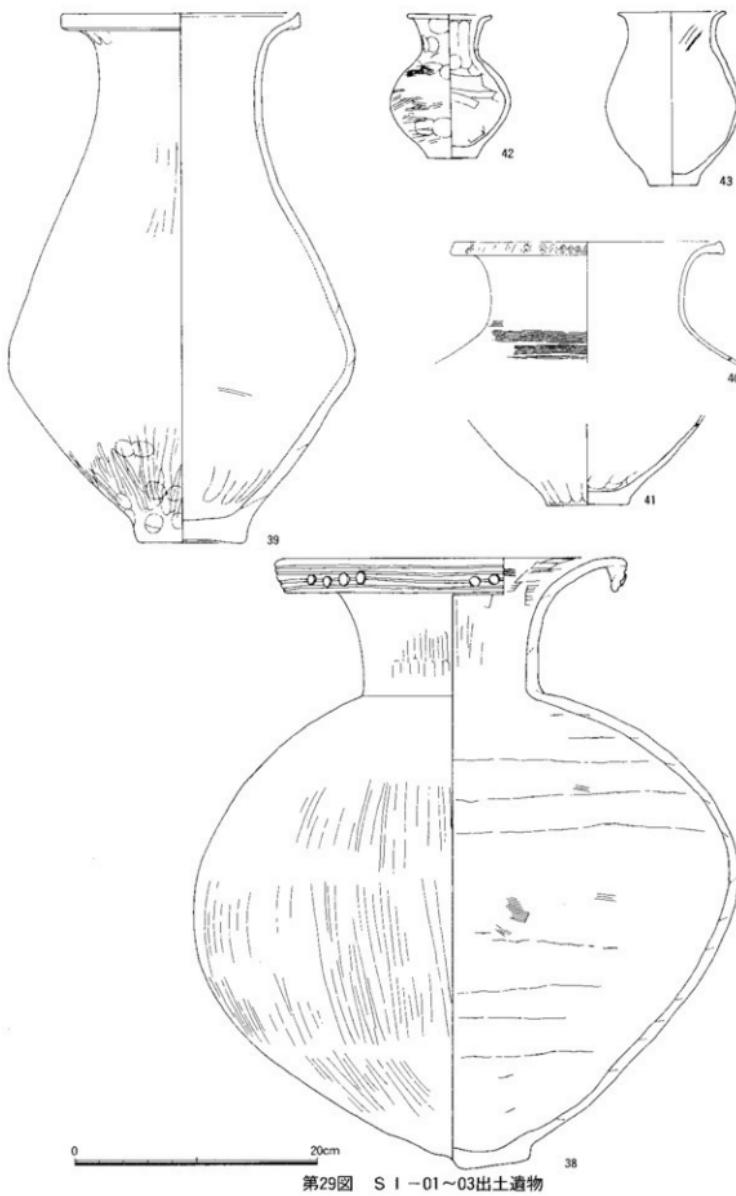


第28図 第4遺構面出土遺物

4個体分まとめて出土している。全部が破碎された状態ではなく、壺のひとつは正立した状態で埋まっていた。遺構は伴わない。

段状遺構

A-9~11区で南西方向に落ち込む段状遺構を検出している。この段を境として堆積層に変化が認められ、下段の西側調査区と南側調査区にかけて、砂、シルト、粘土など



第29図 S I - 01~03出土遺物

S K - 02

検出規模 $1.5 \times 1.8\text{m}$ 、深さ 0.08m を測る不定形の土坑で、堆積土は、黄灰色のシルト～細砂である。遺物は、出土していない。

2. 遺物（第28・29図、図版21～24）

第4遺構面の遺物は、弥生土器を中心に出土している。しかし遺構からの出土遺物は少なく、包含層を含めて図示し得るものを見よう。

32は土師器の高杯脚部で、口縁部は内湾気味に伸びてから外反して終わり、端部の外側にヨコナデによる平坦面を有する。外面にはかすかにハケメが残る。口径は 18.4cm を測る。33は土師器の壺底部でタタキメが認められる。底径は 4.0cm を測る。34も壺または、壺の底部か。底径は 4.2cm を測る。35は壺の破片で、肩部から体部にかけての破片らしく、上部に櫛描き文、その下に並行して刺突烈点文を施している。36は土師器の高杯脚部。器高 9.3cm 、底径 10.9cm を測る。37は把手付小形鉢である。器形は底部から外反して立ち上がり口縁部は内湾して終わる。下の把手取り付け部下方に 1.0cm 程の穿孔を有し、底部から体部中位に黒斑が認められる。口径 10.2cm 、底径 5.0cm を測る。34を除きⅤa層からの出土で、34はVI層からの出土である。38はS I - 01出土土器で、弥生時代後期の大型の壺である。口径 27.2cm 、体部最大径 45.3cm 、底径 7.0cm 、器高 50.7cm を測る。体部は球状を呈し、最大径は体部の中位よりやや上部にある。体部の大きさに比すると貧弱な突出した底部を有する。頸部は体部から短く直立し、口縁部は大きく外反している。口縁部端面には4状の凹線文と円形浮文が施されている。調整は外側が体部から頸部にかけてヘラミガキ、内面は体部にかすかにハケメが残り、頸部はヘラミガキ、口縁部はナデが施されている。体部下位に黒斑がある。39～41はS I - 02出土土器である。所属時期は明確にし得ないがⅢ様式後半からⅣ様式前半か。39は弥生土器壺で口径 19.6cm 、体部最大径 28.4cm 、底径 8.9cm 、器高 43.9cm を測る。算盤玉状の体部から長い頸部を有し、口縁部は頸部から外反し、端部は肥厚して面をもって終わる。端部先端は、上方に向かって伸びる。底部にヘラミガキが施されている。40は弥生土器壺で口径 11.8cm を測る。直立気味の頸部から外反する口縁部を有し、端部は面をもつ。肩部に3条の櫛描文、口縁部に波状文が施されている。摩滅のためか器壁は非常に薄い。41は弥生土器の底部で底径 6.5cm を測る。42・43はS I - 03出土土器でⅣ様式前半か。42は小型の弥生土器壺の完形品。口径 6.8cm 、体部最大径 9.75cm 、底径 4.1cm 、器高 12.05cm を測る。球状の体部に直立する頸部を有し、口縁部は頸部から外反している。底部は厚い。体部外面にヨコ方向のヘラミガキが施される。底部から体部下半にかけて黒斑がある。43も小型の弥生土器壺で口径 8.7cm 、体部最大径 11.0cm 、底径 4.0cm 、器高 14.4cm を測る。長胴の体部から短く外反する口縁部を有し、底部は厚い。磨滅が激しく調整は不明。

第6表 A区第4遺構面ピット一覧表

番号	地区	形状	平面規模(m)	深さ(m)	備考
S P - 54	A - 8	隅丸方形	0.38×0.30	0.14	
S P - 55	A - 8	円形	0.34×0.34	0.12	
S P - 56	A - 4	円形	0.24×0.24	0.06	
S P - 57	A - 4	円形	0.22×0.20	0.06	SP - 58を切っている
S P - 58	A - 4	楕円形	0.32×0.22	0.04	SP - 57に切られている
S P - 59	A - 4	円形	0.27×0.26	0.19	

第5節 第5遺構面の遺構と遺物

第5遺構面は、基本層序Ⅶ層をベース層として検出している。検出面は、A-1~10区でT.P.+6.3~5.1m、A-11~20区でT.P.+5.1~5.2m、A-21~29区でT.P.+5.2~5.7mを測り、B区では東側でT.P.+6.6m、西側でT.P.+5.0mを測る。調査区全体で北東から南西方向への傾斜が認められる。遺構は、A・B区で溝、自然河川を検出している。この面で検出した溝はSD-20・21を以外は検出状況から人為的な遺構と考えがたく、自然流路であったと考えている。遺物は主に弥生土器が出土しているが、遺構及び包含層とも出土遺物の量は少ない。

1. 遺構（付図5）

A区（第31図、図版12）

SD-20（図版13）

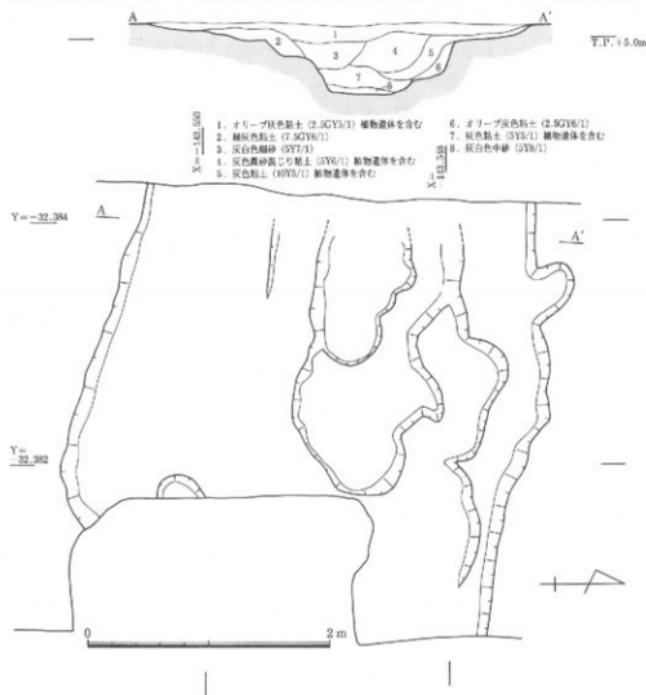
A-19、22~29区で検出した東西方向に直線に走る溝で、両端は、調査区外へ続く。調査区の北側端で検出しているため全体の規模は明らかではないが、A-19区で幅1.38~1.64m、深さ0.31~0.56m、A-28・29区で幅2.36~2.58m、深さ0.81~0.97mを測る。A-23区でSD-21に切られているのがわかる。ほぼ東西方向に直線に走ることから、人為的に開削されたものと考える。堆積土は、検出面から約2/3深さまで、暗灰色粘土、暗オリーブ灰色粘土、緑灰色砂混じり粘土がブロック状に混じり合う層で、下層が暗オリーブ灰色砂混じり粘土、上層が暗色砂質土である。

上層のブロック土は自然堆積とは考えられず、人為的に埋められた様相を示している。遺物は、出土していないので所属時期は明らかではない。

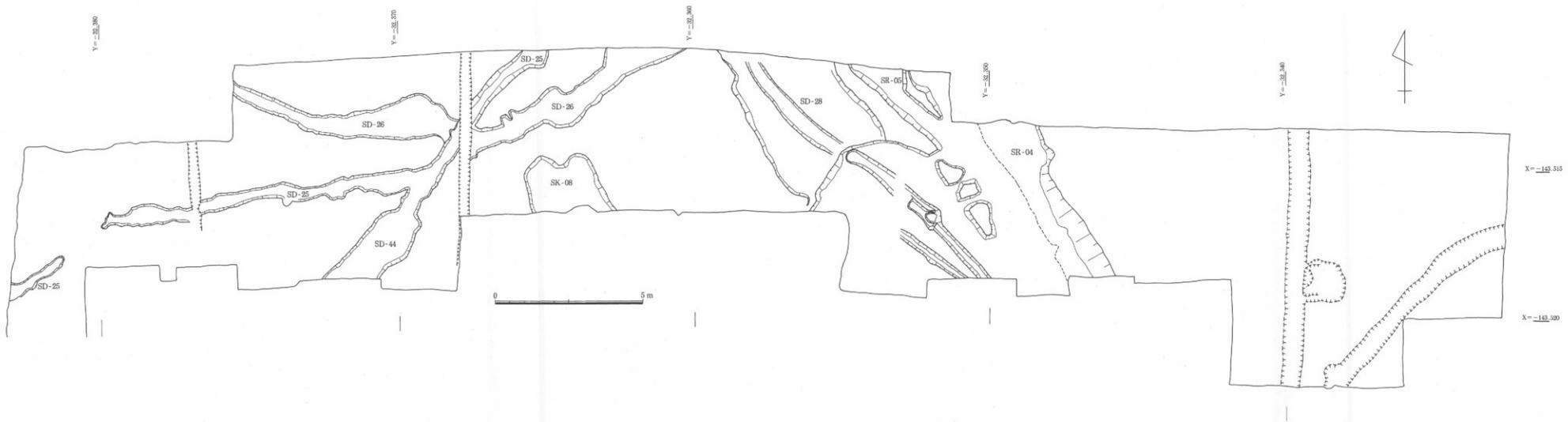
SD-21（図版13）

A-18、23~25区で検出した南東から北西方向に直線に走る溝で、両端は、調査区外へ続く。幅0.36~0.80m、深さ0.10~0.26mを測る。

堆積土は、オリーブ灰色砂混じり粘



第30図 SR-03平面図



第31図 A-1 ~ 11区第5遺構面平面図

土と暗オリーブ灰色粘土の2層である。A-23区でSD-20を切っている。遺物は、出土していない。

SD-22

A-14区で検出した北東から南西方向に走る溝で、両端は、調査区外へ続く。幅0.52~0.68m、深さ0.16~0.26mを測る。堆積土は、暗オリーブ灰色粘土である。遺物は、出土していない。

SD-23

A-13区で検出したほぼ東西方向に走る溝で東端は舌状に終わる。検出長3.3m、幅0.18~0.66m、深さ0.02~0.27mを測る。堆積土は、灰色砂混じり粘質土である。遺物は、出土していない。

SD-24

A-12区で検出したほぼ東西方向に直線に走る溝で、間を攪乱によって切られているが検出長3.6m、幅0.48~0.78m、深さ0.04~0.09mを測る。堆積土は、灰色砂混じり粘質土である。遺物は、出土していない。

SD-25

A-8~11区で検出しており、A-8区では北東から南西方向、A-8区でSD-44を分岐しA-11区までほぼ東西方向に直線に走る。A-11区で途切れているが検出長18.5m、幅0.28~0.80m、深さ0.02~0.18mを測る。堆積土は、灰オリーブ色中砂である。A-8区でSD-26を切っている。遺物は、

出土していない。

SD-26

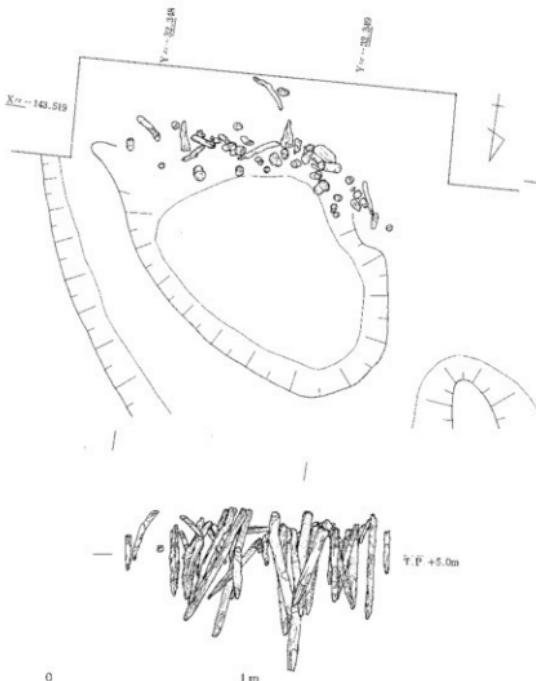
A-7~10区で検出しており、A-7~8区では北東から南西方向、A-8区でSD-25に切られ方向を変えほぼ東西方向に走る。検出長13.2m、幅0.36~1.5m、深さ0.04~0.16mを測る。堆積土は、灰白色~黄灰色の微砂~粗砂である。遺物は、サスカイト剝片が出土している。

SD-27

A-18区で検出したほぼ東西方向に走る溝で西端は舌状に終わる。検出長3.1m、幅0.7~0.96m、深さ0.12~0.25mを測る。堆積土は、オリーブ灰色砂混じり粘土の1層である。遺物は、出土していない。

SD-28

A-5・6区で検出しており、北西から南東方向に走る。検出長3.1m、幅0.7~0.96m、深さ



第32図 SR-05しがらみ検出状況

0.12~0.25mを測る。堆積土は、灰色砂混じり粘質土、灰色粘土、灰色砂質土の3層である。溝といふよりは幅が広く浅い落ち込み状の遺構である。遺物は、出土していない。

S K-08

A-5・6区で検出している不定形の土坑で、検出規模 $1.7 \times 2.5\text{m}$ 、深さ $0.02\sim 0.06\text{m}$ を測る。堆積土は、暗灰色砂混じり粘質土の1層である。遺物は、土器片が1点出土しているが、時期、種類は特定できない。

S R-03 (第30図)

A-16・17区で検出しており、ほぼ東西方向に走る。検出長 3.5m 、幅 $3.2\sim 3.76\text{m}$ 、深さ $0.42\sim 0.59\text{m}$ を測る。堆積土は、主に植物遺体を含む灰色微砂～粘土である。遺物は、弥生土器片が出土している。

S R-04

A-4・5区で検出しており、北西から南東方向に走る。検出長 6.5m 、幅 $1.26\sim 1.82\text{m}$ 、深さ $0.51\sim 0.62\text{m}$ を測る。A-5区でS R-05の東側肩を切りながら並行して走ることから、S R-05よりも後に流れが形成されたものと考えられる。堆積土は、主に灰色～灰白色のシルト～粗砂で、ラミナが観察される。遺物は、弥生時代後期の無頸壺、甕が出土している。

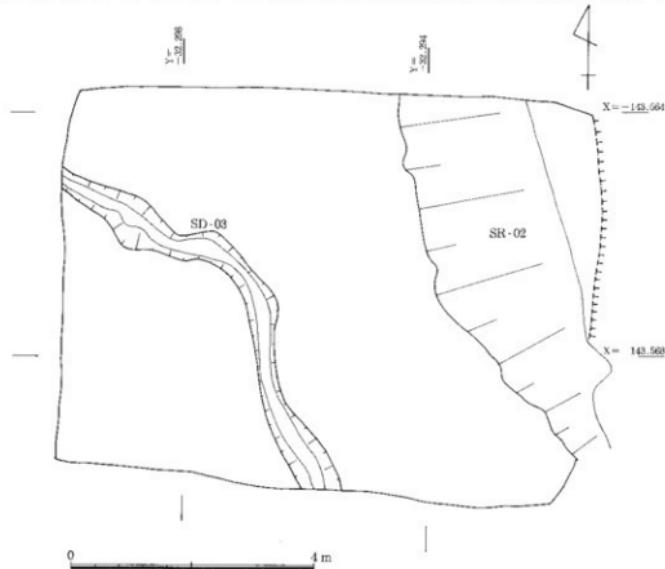
S R-05 (第32図、図版14)

前述のようにS R-04に切られており、検出長 4.2m 、幅 $0.79\sim 1.21\text{m}$ 、深さ $0.23\sim 0.30\text{m}$ を測る。堆積土はS R-04と酷似しており、灰色～灰白色の細砂～粗砂である。遺構の南端でしがらみを検出している。しがらみは流れに対して直角に約40本程の杭を打ち並べているが、横木は存在しなかった。遺物は弥生時代後期土器が出土している。S R-04・05は切り合い関係はあるが、時期差はあまりないものと考えられる。

B区 (第33
図、図版17)

SD-03

調査区をわずかに蛇行しながらほぼ南北から北西方に向走る。検出長 7.1m 、幅 $0.3\sim 0.4\text{m}$ 、深さ $0.04\sim 0.17\text{m}$ を測る。堆積土は、灰白色砂で、遺物は、出土していない。



第33図 B区第5遺構面平面図

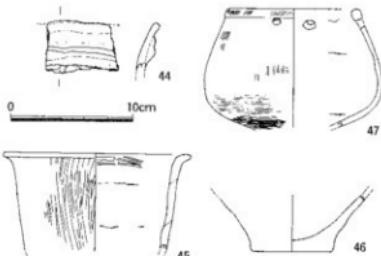
S R - 02 (図版17)

調査区の東側部分で検出した自然河川で、推定で南東から北西方向に走る。西側肩を検出していけるのみで規模は不明であるが、かなり大規模な流路になるものとと考えられる。深さは1.05~1.38mを測る。堆積土は、緑灰色~灰黄色のシルト~砂でラミナが観察される。遺物は、出土していない。

2. 遺物 (第34図、図版20・21・25)

いずれも破片ばかりで、図化し得たものはほんの一部に過ぎない。

44は口縁部付近であるが磨滅が激しく、表面の調整は不明である口縁部下に断面三角形の低い突帯を有する。所属時期については不明である。45は弥生土器の小型の甕で、口縁部は「く」の字形に外反し、体部は肩が張らず直線的である。外面はタテ方向のヘラミガキ、内面の口縁部近くにヨコ方向のヘラミガキを施す。口径14.8cmを測る。IV様式の前半か。46は弥生土器底部で底径6.4cmを測る。47は無形壺で、底部は欠損。体部上半部には簾状文が微かに認められ、体部下半から底部にかけてはヘラミガキ施される。口縁端部は肥厚し段を有する。口径11.0cmを測る。IV様式の後半に属する。



第34図 第5遺構面出土遺物

第6節 第6遺構面の遺構と遺物

第6遺構面は、基本層序Ⅶ層をベース層として検出している。検出面は、A-1~10区でT.P.+6.0~4.8m、A-11~20区でT.P.+4.7~4.8m、A-21~29区でT.P.+4.9~5.4m、を測る。調査区全体で北東から南西方向への傾斜が認められる。遺構は、A区で土坑、溝、自然河川を検出している。遺物は、SK-09から縄文土器が出土しているだけである。

1. 遺構 (付図6)

A区 (第36図、図版14)

SD-29 (図版15)

A-8・9区で検出しているほぼ東西方向に走る溝で、両端は舌状に終わる。検出長6.9m、幅0.5m、深さ0.11~0.18mを測る。堆積土は、青黒色砂混じり粘質土である。

SD-30

A-5・6区で検出している南東から北西方向にほぼ直線に走る溝で、両端は舌状に終わる。検出長7.4m、幅1.3~1.8m、深さ0.17~0.34mを測る。堆積土は、青黒色砂混じり粘質土である。中央付近の東側肩によりそれぞれSD-31・33・34を分岐している。

SD-31

A-5区で検出している南東から北西方向にほぼ直線に走る溝で、北西端でSD-30に合流している。検出長4.8m、幅0.35~0.6m、深さ0.15~0.20mを測る。堆積土は、暗灰色砂混じり粘質土である。中央付近でSD-32を切っている。

SD-32

A-5区で検出している北東から南西方向にほぼ直線に走る溝で、北東端は舌状に終わり、南西端はSD-31に切られている。中央付近ではSD-33に切られている。検出長2.2m、幅0.2~0.5m、深さ

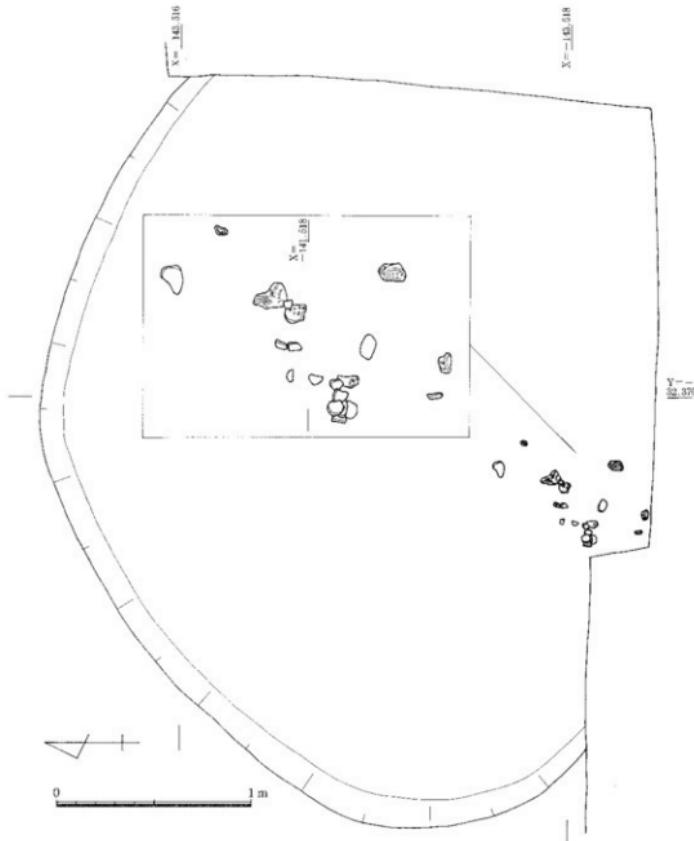
0.11～0.21mを測る。堆積土は、暗灰色砂混じり粘質土である。

SD-33

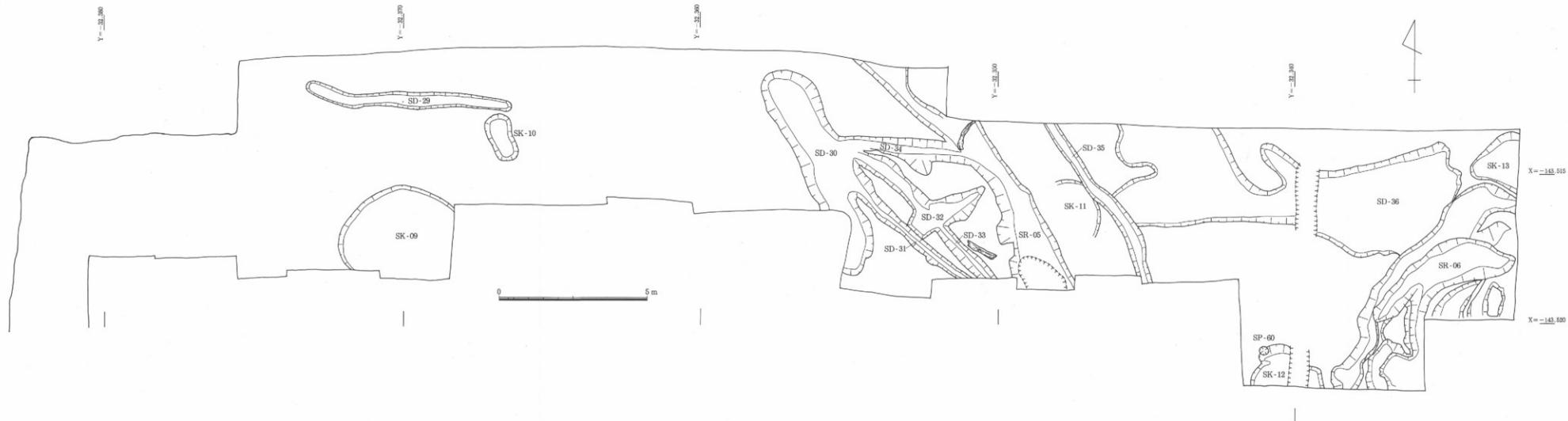
A-5区で検出している南東から北西方向にはば直線に走る溝で、北西端でSD-30に合流している。検出長6.1m、幅0.49～0.75m、深さ0.09～0.16mを測る。堆積土は、暗灰色砂混じり粘質土である。中央付近でSD-32を切っている。

SD-34

A-5区で検出しているほぼ東西方向に直線に走る溝で、東端でSR-05に、西端ではSD-30に合流している。検出長4.25m、幅0.35～1.2m、深さ0.04～0.22mを測る。堆積土は、暗灰色砂混じり粘質土である。



第35図 SK-09平面図・縄文土器出土状況



第36図 A-1~11区第6遺構面平面図

S D - 35

A - 4 区で検出している南東から北西方向に直線に走る溝で、中央部で S K - 11 接し、S D - 36 を切っている。検出長6.4m、幅0.3~0.5m、深さ0.08~0.16mを測る。堆積土は、暗灰色砂混じり粘土である。

S D - 36

A - 1 ~ 3 区で検出しており、ほぼ東西方向に走る不定形の溝である。A - 3 区で北西方向と西方向の2条に分岐し、西方向のものは S D - 35 に切られ、東端では S R - 06 に切られている。検出長11.2m、幅2.1~3.1m、深さ0.18~0.34mを測る。堆積土は、上層から青黒色砂混じり粘土、緑灰色中砂の2層が水平に堆積している。

S K - 09 (第35図、図版15)

A - 8・9 区で検出している4.0×4.0mのほぼ円形を呈する土坑で、深さ0.02~0.04mを測る。堆積土は、黒色粘質土で、炭化物が混じる。遺物は縄文時代中期の深鉢がほぼ1個体分出土している。

S K - 10 (図版15)

A - 8 区で検出している0.8×1.6mの長円形の土坑で、深さ0.12~0.18mを測る。堆積土は、黒色粘質土である。

S K - 11

A - 4 区で検出している。推定で径約2.3mの円形の土坑であると考えられるが、半円状で検出している。深さ0.02~0.18mを測る。堆積土は、黒色粘質土である。

S K - 12

A - 2・3 区で検出している不定形の土坑で、検出規模約2.45m、深さ0.08~0.14mを測る。堆積土は、黒色粘質土である。

S K - 13

A - 1 区で検出している不定形の土坑で、検出規模約2.0m、深さ0.09~0.23mを測る。堆積土は、黒色粘質土である。

S R - 06

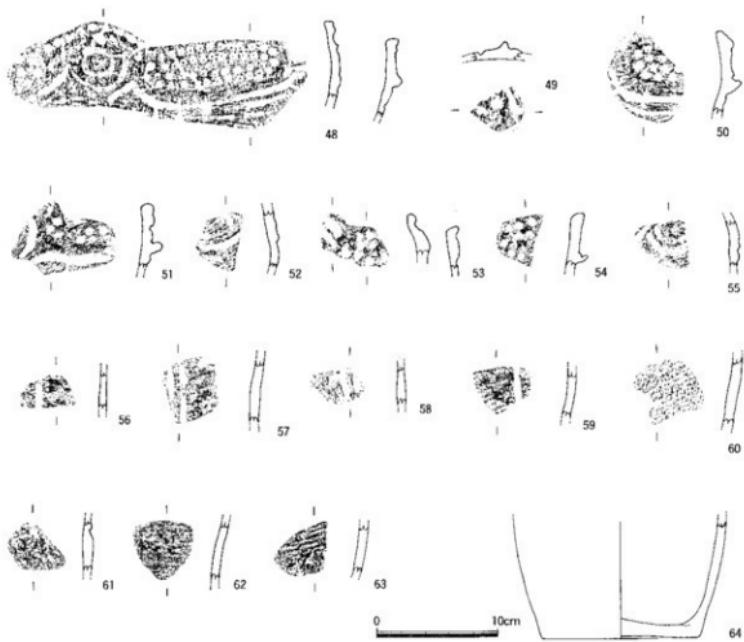
A - 1・2 区で検出している南東から北西方向に走る自然河川である。検出長約8.2m、深さ0.6~0.8mを測る。堆積土は、上層に薄く暗灰色砂混じり粘質土が堆積し、下層には灰色~オリーブ灰色のシルト~粗砂が堆積している。

S P - 60

A - 3 区で検出している円形のピットである。検出規模0.24×0.25m、深さ0.18mを測る。堆積土は、青黒色砂混じり粘土である。第6遺構面で検出したのはこれ1個のみである。柱穴ではなさそうである。

2. 遺物 (第37図、図版25・26)

S K - 09で縄文土器片が数十点出土している。すべて同一個体のものと考えられ、他の個体の破片は含まれていなかった。数量から推定すると、ほぼ一個体分出土しており、ここではその1部を紹介する。このうち48、51、60、64が接合資料である。48~55が口縁部付近、56~62が体部の破片で、63が底部である。破片より推定復元すると第38図のようになる。水平口縁と山形口縁が5単位組み合わさった形態で、体部にややくびれをもつ深鉢であると考えられる。水平口縁部は、降帯による横長の眼鏡状区画内に竹管による刺突文が施されている。降帯下部には2条の太い沈線が認められ、上部の沈線は向かって



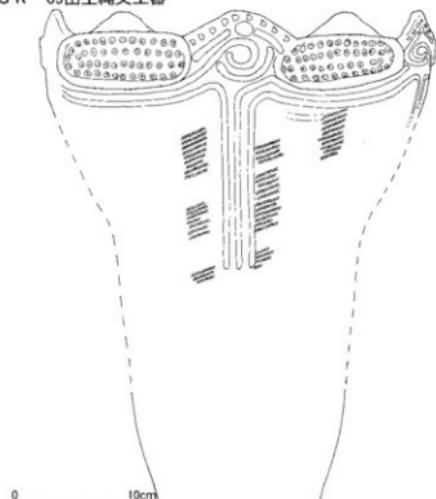
第37図 SK-09出土縄文土器

右側の山形口縁へ続き、渦巻き文を構成している。下部の沈線は、逆に左側の山形口縁に向かい、胴部の下に向かって伸びている。破片から推定すると、胴部中位までしか続かないようである。山形口縁部は、口唇部に同一原体による押し引き刺突文と沈線による渦巻き文が施されている。口縁部と底部には縄文は認められず、胴部にかすかにR/L Lの縄文が観察される。縄文時代中期末の北白川C式土器に属する。

第7節 その他の出土遺物

1. 石器（第39図、図版27）

調査を通して5点の石器が出上している。いずれもサヌカイト製で、65・67・68はIIIa層（68はB区から）、66はVI層、69はS D -

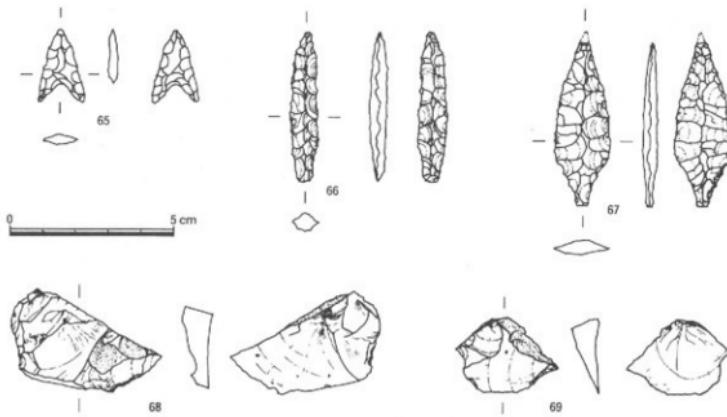


第38図 縄文土器推定復元図

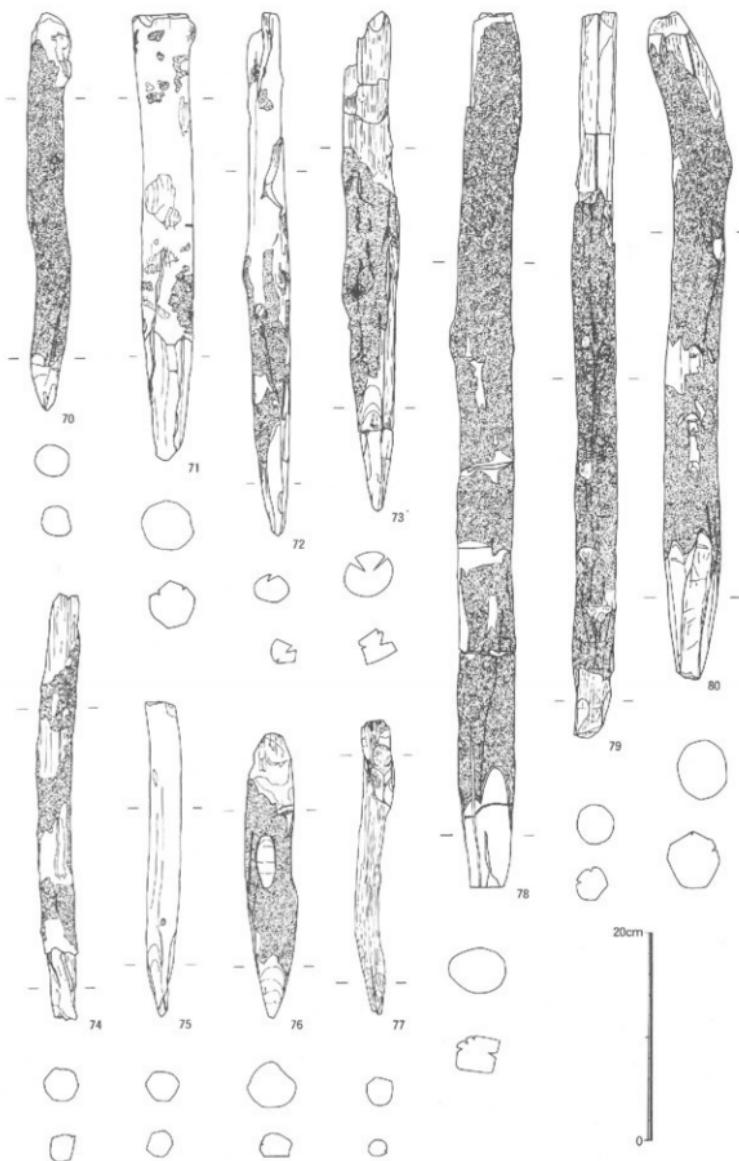
26からの出土である。65は凹基式の石鎌である。長さ2.25cm、幅1.4cm厚さ0.3cm、重量は0.55gと軽い。表面は風化が著しく剥離面を確認しづらい。66は石錐（ドリル）で、長さ4.6cm、幅0.9cm、厚さ0.5cm、重量2.2gを測る。67は有茎式石鎌。先端部は欠失しているが丁寧な調整で薄く仕上げられている。長さ5.05cm、幅1.7cm、厚さ0.45cm、重量3.1gを測る。縁は交互剥離により鋸歯状をなす。68・69は剥片で二次的な加工は施されていない。68は長さ3.25cm、幅4.4cm、厚さ1.0cm、重量9.85gを測る。69は長さ2.3cm、幅3.15cm、厚さ0.85cm、重量3.65gを測る。

2. 木器（第40・41図、第7表）

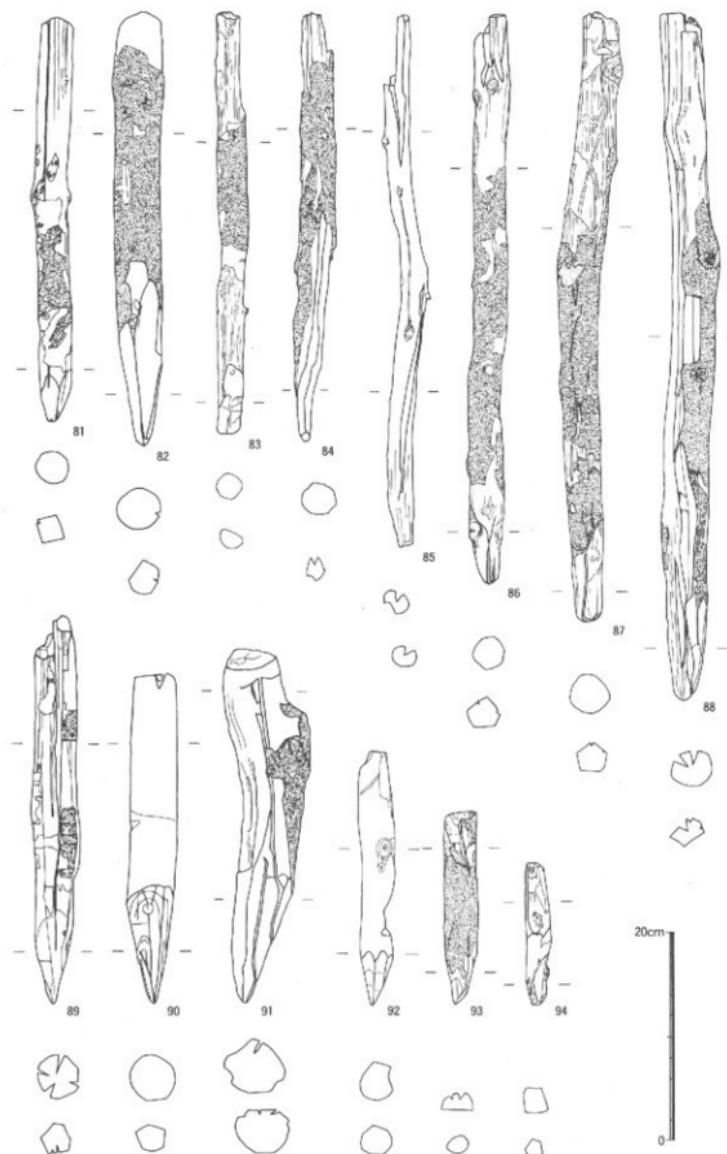
S R-05で検出されたしがらみに使用されていた杭である。自然木を利用しているので樹皮が残存していた。先端は面を取り尖らせている。



第39図 石器実測図



第40図 SR-05出土杭(1)



第41図 SR-05出土杭（2）

第7表 SR-05出土杭観察表

番号	地 区	遺 構	形 状	法 量 (cm)	備 考
70	A-8	SR-05	丸木	長38.2・径4.0	樹皮残存・先端部3面取り
71	A-8	SR-05	丸木	長43.1・径5.9	樹皮僅かに残存・先端部5面取り
72	A-8	SR-05	丸木	長50.2・径4.5	樹皮残存・先端部3面取り
73	A-8	SR-05	丸木	長48.2・径5.1	樹皮残存・先端部4面取り
74	A-8	SR-05	丸木	長41.0・径3.1	樹皮残存・先端部欠損・2面取り?
75	A-8	SR-05	丸木	長30.2・径3.2	樹皮無し・先端部5面取り
76	A-8	SR-05	丸木	長27.4・径4.8	樹皮残存・先端部2面取り
77	A-8	SR-05	丸木	長28.3・径2.9	樹皮無し・先端部2面取り
78	A-8	SR-05	丸木	長84.0・径5.2	樹皮残存・先端部欠損・4面取り
79	A-8	SR-05	丸木	長71.3・径4.0	樹皮残存・先端部欠損・2面取り
80	A-8	SR-05	丸木	長64.2・径5.7	樹皮残存・先端部6面取り
81	A-8	SR-05	丸木	長39.0・径3.9	樹皮残存・先端部4面取り
82	A-8	SR-05	丸木	長41.7・径5.0	樹皮残存・先端部3面取り
83	A-8	SR-05	丸木	長40.5・径3.0	樹皮残存・先端部欠損・1面取り?
84	A-8	SR-05	丸木	長41.2・径3.5	樹皮残存・先端部2面取り
85	A-8	SR-05	丸木	長51.2・径2.7	樹皮無し・先端部面取り無し
86	A-8	SR-05	丸木	長54.8・径3.5	樹皮残存・先端部5面取り
87	A-8	SR-05	丸木	長58.7・径4.2	樹皮残存・先端部5面取り
88	A-8	SR-05	丸木	長67.1・径4.5	樹皮残存・先端部3面取り
89	A-8	SR-05	丸木	長37.3・径4.0	樹皮僅かに残存・先端部6面取り
90	A-8	SR-05	丸木	長31.7・径4.5	樹皮無し・先端部4面取り
91	A-8	SR-05	丸木	長34.0・径7.5	樹皮僅かに残存・先端部3面取り
92	A-8	SR-05	丸木	長24.4・径3.4	樹皮無し・先端部5面取り
93	A-8	SR-05	丸木	長18.5・径3.2	樹皮残存・先端部2面取り
94	A-8	SR-05	丸木	長13.8・径2.4	樹皮無し・先端部5面取り

第6章 まとめ

今回の調査によって明らかになった事柄を、これまで調査が実施されている付近の遺跡と関連づけて、古い時期から順に述べ、まとめとする。

縄文時代

第6遺構面SK-09から中期末の土器が出上しているだけで、これ以外の遺構及び包含層からも土器は出土していない。器表には摩滅が認められるが、同一個体と考えられる破片がほぼ一個体分出土しており、この土器が出土した不整円形の浅い窪みを今のところこの時期の遺構として考えている。これまで、鍋田川遺跡（当地より南東約300mの大阪産業大学構内調査地点）⁽¹⁾で早期末～前期初頭、中期後半、晩期の土器片がそれぞれ出土しているが、遺構に伴うものではなかった。遺構の性格は不明であるが、縄文時代の遺構面を検出し、自然路以外の遺構から縄文土器が出土したのは市内でも初めてであり、その意義は大きい。しかし今回の調査でも集落跡を示す具体的な遺構は検出されていないが、近辺に集落が存在していたことは確実で、今後の周辺の調査に期待したい。

弥生時代

同じ中垣内遺跡内（南へ約400mの関西電力株式会社東大阪変電所内調査地点）では前期～中期の集落跡⁽²⁾が確認されているが、今回の調査では前期の遺構・遺物は検出していないので、この時期には集落の範囲から外れるようである。中期～後期では、自然河川、溝、大型畦畔状遺構を検出しているが、遺構からの出土遺物が少ないため時期を特定するのは困難な状況である。遺構検出段階において溝としたもののかには、人為的な遺構ではなく自然流路と考えられるものが多く、集落跡を示すような具体的な遺構は検出されなかったものの、SR-06の杭を打ち込んだがらみや、東西方向に直線に走り、人工的に開削されその後なんらかの理由で埋め戻されたと考えられるSD-20などは近くに集落の存在を示唆するものであり、調査地が集落の中心とされる場所よりさほど遠く離れていないことを示していると考えられる。大型畦畔状遺構には水田を区画するような小畦畔は伴わなかったので水田跡ではないようである。第4遺構面で検出した土器集積SI-01～03は近くにこれに関連する遺構が検出されていないのでいまのところ人為的に置かれたものか、単なる上部からの流れこみによる土器溜りなのかはさらに検討を必要とする。

古墳時代

前期の遺構と考えられるのは第4遺構面のSD-17のみで、ほかに集落に関連した遺構は検出されなかったが、近くにこの時期の集落の存在が推定される。これまでのところ、同じ中垣内遺跡内（西へ約300mの大阪産業大学構内調査地点）では前期の集落跡⁽³⁾が確認されており、また鍋田川遺跡（東へ約400mの阪奈道路登り線大東橋下鍋田川付近⁽⁴⁾とその下流⁽⁵⁾）では前期の遺構・遺物が出土しており、これらとの関連が考えられる。中期の遺構・遺物は検出されていないが、後期では第3遺構面で掘立柱建物と水田跡を検出している。調査範囲が限定されていたため、集落の規模は不明であるが、検出面の地形は北東から南西方向の緩やかな傾斜を示し、土層の堆積状況から推定すると南西は水性の粘質土、シルト～微砂が堆積し低湿地の様相を呈し、北東部は微高地で、それぞれ水田域と居住域とに別れていたものと考えられる。柱穴の検出状況から推定すると居住域は南東域に広がりをもつものと考えられる。

奈良時代

次の鉢溝の残る中世の耕作土層から少量の遺物が出土しているが、遺構は検出していない。遺物の出

土状況は、明らかに上方（東側）からの流れこみによるものである。この時期の遺構、遺物は東側にある寺川遺跡一帯で検出しており、むしろ集落はこちらに存在するものと考えられる。

中世

水路と耕作に伴う鋤溝を検出しているだけで、集落に関連するような遺構は検出していないことから、この時代は耕作地として利用されていたものと考えている。

近世～現代

前代に引き続き耕作地として利用されていたと考えられ、土地を区画するように東西方向、南北方向に走る水路を検出している。水路は近代まで利用されていたもので、軍需工場が建てられた時点で廃絶されたと考えられる。ただ S D-11のみがその後も利用され続けたもので、小字を調べると S D-11は小字の境界を流れている。水路をはさみ北側の小字名が「瀬戸口」、南側が「杉木」である。また、南北方向に検出した S D-09も小字境と一致しており、西側の「東コモ田」とを分けている。これらの水路の中には、その起源を中世或いはそれ以前にまで遡ることができるものもあり、特に小字境を示している水路は古代の条里制を復元する上で重要である。

- (1) 中村浩1981『和泉陶邑窯の研究』 柏書房
- (2) 泉拓良・家根祥多1985「第1章 北白川追分町遺跡出土の繩文土器」『京都大学埋蔵文化財調査報告』京都大学埋蔵文化財センター
- (3) 中達健一・黒田淳1991『寺川・鍋田川遺跡発掘調査報告書』大東市教育委員会
- (4) 黒田淳1990『中垣内遺跡発掘調査報告書』大東市教育委員会 その後実施された調査では前期に統いて中期にも集落が営まれていたことが確認されている。
- (5) 壓穴住居跡、土坑などの遺構が検出され、直弧文入板状木製品、小型素文鏡、管玉などが出土している。祭祀色の濃い集落跡である。
- (6) 昭和33年、鍋田川の砂防堰堤工事の際、大量の高杯と卜骨、刻骨、滑石製有孔円板が出土している。

報告書抄録

ふりがな	なかがいといせきはくつちょうさほうこくしょ						
書名	中垣内遺跡発掘調査報告書						
副書名	大東市立市民体育館建替え工事に伴う						
卷次							
シリーズ名	大東市埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	第11集						
編著者名	黒田 淳						
編集機関	大東市教育委員会大東市立歴史民俗資料館						
所在地	574 大阪府大東市新町13番30号 ☎0720-73-3521						
発行年月日	1997年(平成9年)3月31日						

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
中垣内遺跡	大阪府大東市 寺川	27218	4	34度 42分 20秒	135度 38分 49秒	1994年11月14日～ 1995年3月23日	1.206m ²	市立市民体育館建替え

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中垣内遺跡	集落跡	縄文時代中期 弥生時代中期～後期 古墳時代 中世～近世	土坑、自然流路 溝、自然流路、しがらみ、畦状遺構 土器群 溝、建物跡、水田跡 溝（水路跡）	縄文土器 弥生土器、石器 杭 土師器、須恵器 瓦器、土師器、陶磁器類、ミニチュア土製品、輸入陶磁器	縄文中期北白川C式 畿内第IV～V様式 布留甕 瓦器椀、土師器皿、土人形、青磁

付 載

市立市民体育館埋蔵文化財発掘調査に伴う
花粉等分析報告

大東市中垣内遺跡における花粉、プラント・オパール分析

川崎地質株式会社（担当者：渡辺正巳）

1 はじめに

本報告は、大東市教育委員会が遺跡内での耕作の実態および周辺地域での植生変遷の推定のために川崎地質株式会社に委託して実施した花粉分析、プラント・オパール分析の概報である。

中垣内遺跡は大阪府東部の大東市に位置し、生駒山地の山麓に立地する。今回の調査では、縄文時代中期から近代に至る複合遺跡であることが明らかになっている。

2 試料について

図1に示す調査区内の3地点において、大東市教育委員会によって分析用試料が採取された。各地点の柱状図、および試料採取標準を図2～4の花粉ダイアグラム中に示す。花粉分析は全試料を対象とし、プラント・オパール分析は3地点で11試料を対象として実施した。

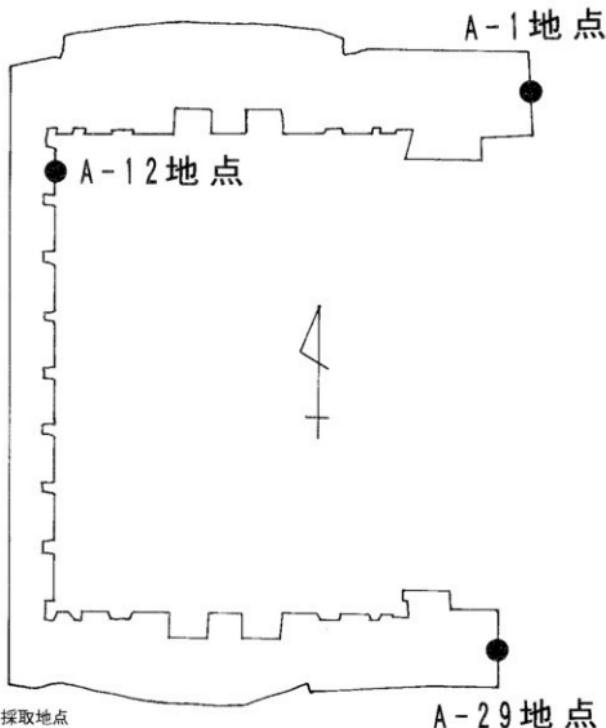


図1 試料採取地点

3 分析方法および分析結果

(1) 分析方法

花粉分析処理は渡辺(1995)に従い、プラント・オパール分析処理は藤原(1976)のグラス・ビーズ法に従った。

(2) 分析結果

花粉分析結果を図2~4、プラント・オパール分析結果を図5~7に示す。

花粉ダイアグラムでは、木本花粉を基数とし各種類の出現率を百分率で算出したものをスペクトルで表した。また木本花粉検出数の少ない試料については、出現した種類を*で示した。

プラント・オパールダイアグラムでは、1 g 当たりの検出数をスペクトルで表した。

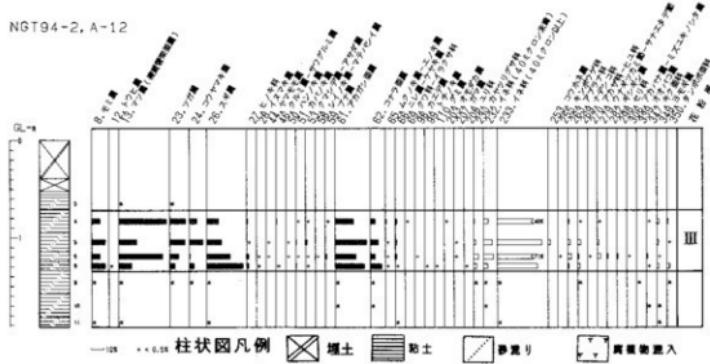


図2 A-12地点の花粉ダイアグラム

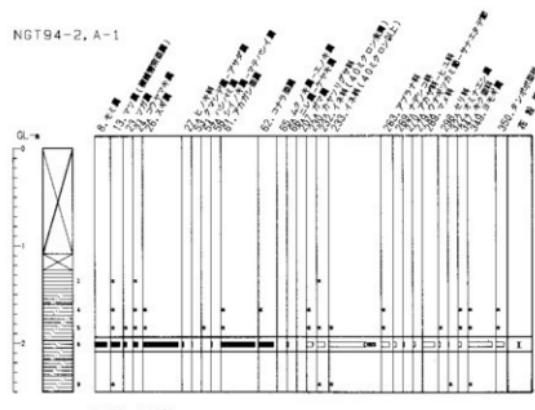


図3 A-1地点の花粉ダイアグラム

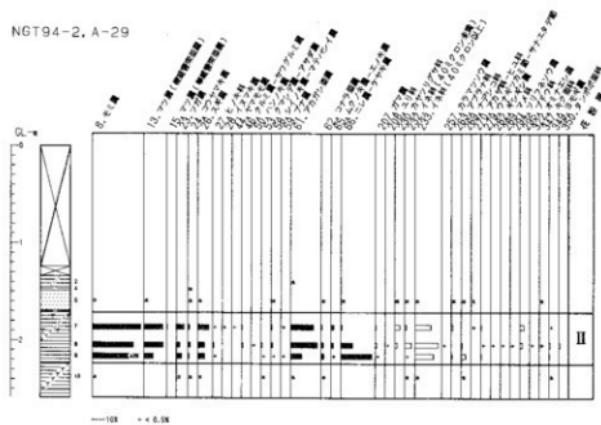


図4 A-29地点の花粉ダイアグラム

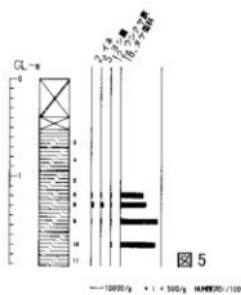


図5 A-12地点のプラント・オパールダイアグラム

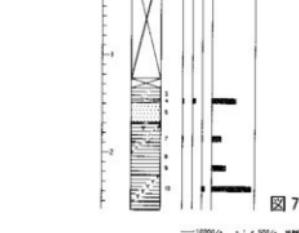
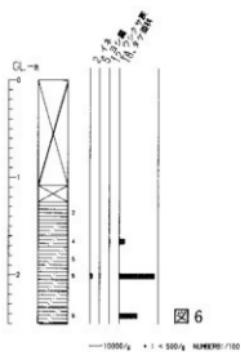


図6 A-1地点のプラント・オパールダイアグラム

図7 A-29地点のプラント・オパールダイアグラム

4 花粉分帶

花粉分析結果及び各地点間の層位対比より、3花粉帶を設定した。

(1) I 帯 (A-1 地点 試料No.8)

特に高い出現率を示す種類はない。スギ属、アカガシ亜属が他の種類に比べ高い出現率を示すほか、モミ属、マツ属（複維管束亜属）、コナラ亜属などもやや高い出現率を示す。草本花粉では、イネ科（40ミクロン以上）が高率を示す。

(2) II 帯 (A-2 9 地点 試料No.7～9)

モミ属が他の種類に比べ高い出現率を示す。その他、マツ属（複維管束亜属）、アカガシ亜属が他の種類に比べやや高い出現率を示す。また下部で、ニレ属-ケヤキ属が他の試料に比べ高い出現率を示す。草本花粉では、特に高率で出現する種類はない。

(3) III 帯 (A-1 2 地点 試料No.4～8)

アカガシ亜属、マツ属（複維管束亜属）、スギ属が他の種類に比べ高率で出現する。これらのうち、アカガシ亜属は安定した出現率を示すものの、マツ属（複維管束亜属）は出現率が安定しない。またスギ属は減少傾向を示す。草本花粉ではイネ科（40ミクロン以上）が高率を示す。

5 古環境変遷

花粉分帶とともに、遺跡周辺での各時期の植生および堆積環境を推定した。

(1) I 帯期（縄文時代後期～弥生時代前期）

いわゆる「弥生の小海退期」に相当する時期である。今回得られた花粉組成でも、スギ属などの針葉樹が高率になるなど、従来知られている同時期の花粉組成の特徴と一致する。

遺跡周辺の低地から山麓には、アカガシ亜属を要素とする照葉樹林が分布していたと推定できる。一方、スギなどを要素とする中間温帯林が生駒山地山頂から山麓の広い範囲に分布し、遺跡のかなり近くにまで分布していた可能性もある。後述のように遺跡内で稲作が行われていたと仮定すれば、遺跡周辺の照葉樹林でも人為による伐採などが行われていた可能性があり、本来あるはずの照葉樹林の分布が狭められたために、中間温帯林要素が過大評価されている可能性もある。

一方、イネ科（40ミクロン以上）花粉が高率で出現し、イネのプラント・オバールも2200個/gと比較的多い含有量を示すことから、A-1 地点、あるいは遺跡内で稲作が行われていた可能性が高い。稲作の開始を弥生時代以降とすれば、I 帯期は弥生時代以降の植生を反映していると言える。

(2) II 帯期（弥生時代中期～古墳時代中期）

前の時期から一転して、イネ科（40ミクロン以上）花粉の出現率が低くなり、プラント・オバールの含有量も600個/gと少量になる。遺跡内あるいは周辺部での稲作を否定できないものの、A-2 9 地点で稲作が行われていた可能性は極めて低い。

周辺の森林植生は、照葉樹林の分布域が前時期からさらに縮小したと推定できる。中垣内遺跡内の他地点での分析結果（坂本、1995）では、モミ属が今回の分析結果ほど高率には出現しない。しかし、この時期の分析結果では、前後の時期に比べモミ属がやや高率になる。したがってモミ属は今回の調査地近辺の限られた地域に分布していたと考えられる。

(3) III 帯期（古墳時代中期～中世後半）

イネ科（40ミクロン以上）花粉が高率で出現し、イネのプラント・オバールも600～2200個/gの含有

量を示すことから、A-1・2地点、あるいはその周辺で稲作が行われていた可能性がある。

坂本（1995）との比較から、最上部（中世後半）でのマツ属（複維管束亜属）の増加は、遺跡全体の現象と考えられる。一方、中部（古墳時代後期）でのマツ属（複維管束亜属）の増加は、局地的な現象である可能性が高い。したがって周辺の照葉樹林は、前の時期から中世前半まではらさほど変化しなかったと考えられるが、中世後半にはいるとアカマツを要素とする二次林の拡大が推定される。

6 まとめ

今回の花粉・プラント・オパール分析から、以下のことことが明らかになった。

- (1) 花粉分析結果から、I、II、III帯を設定した。
- (2) 遺跡周辺はの縄文時代晚期から中世にかけての断続的な植生変遷が明らかになった。
- (3) 遺跡内あるいはきわめて近い地域で、I帯期（縄文時代晚期～弥生時代前期）とIII帯期（古墳時代中期～中世後半）で稲作が行われていたと推定される。

7 引用文献

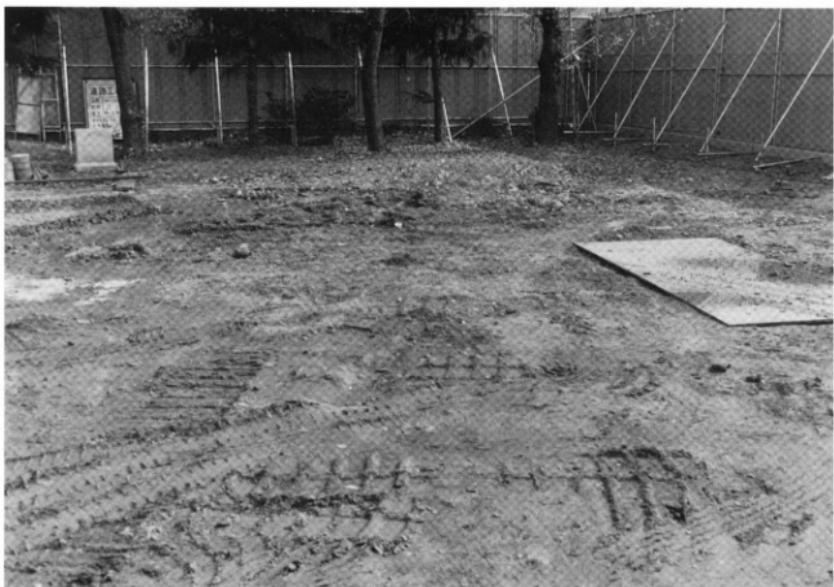
- 藤原宏志（1976）. プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）—数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法—. 考古学と自然科学, 9, 15-29.
- 坂本清子（1995）大阪府中垣内遺跡の花粉分析—人為的作用による自然環境の変遷と農耕—. 大阪産業大学論集自然科学編, 97, 11-21.
- 渡辺正巳（1995）40.花粉分析法. 考古学ライブラリー-65考古資料分析法, 84-85, ニュー・サイエンス社, 東京.

図 版

図版1 調査前の状況



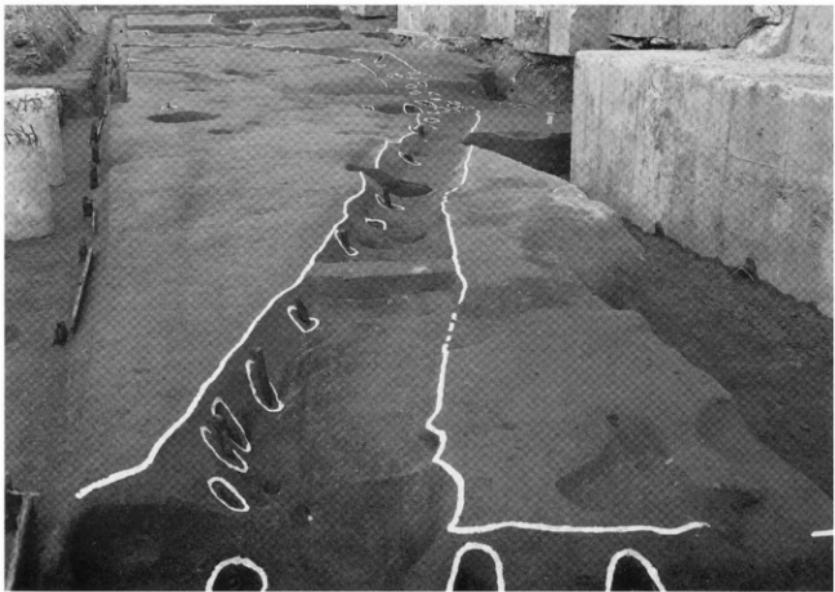
A-20~29区（西より）



B区（西より）



SD-13・14検出状況（東より）



SD-12・13検出状況（西より）



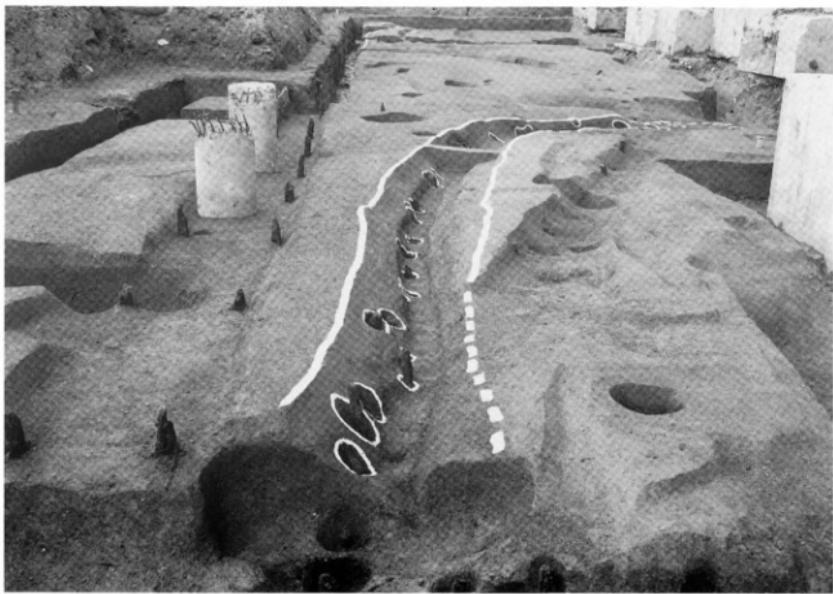
SD-09他検出状況（北より）



SD-04他検出状況（東より）



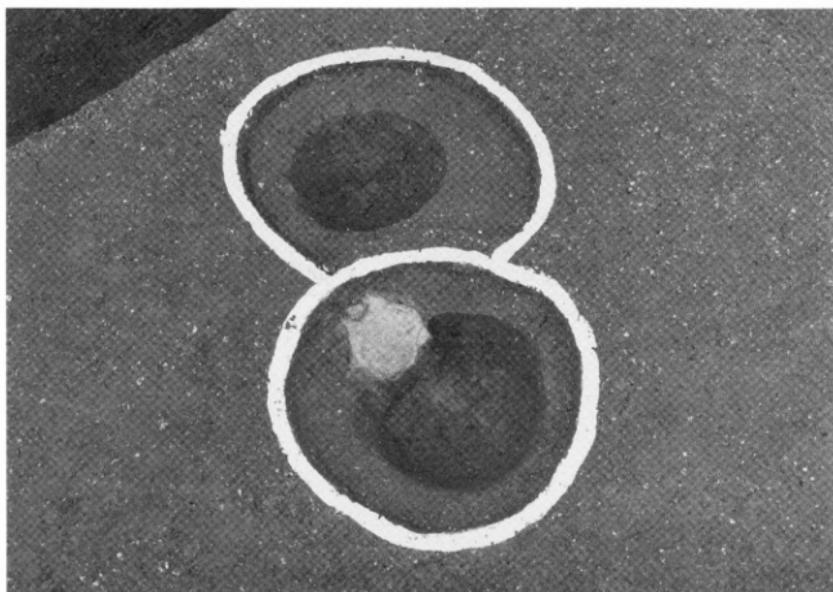
SD-16検出状況（東より）



SD-15検出状況（西より）



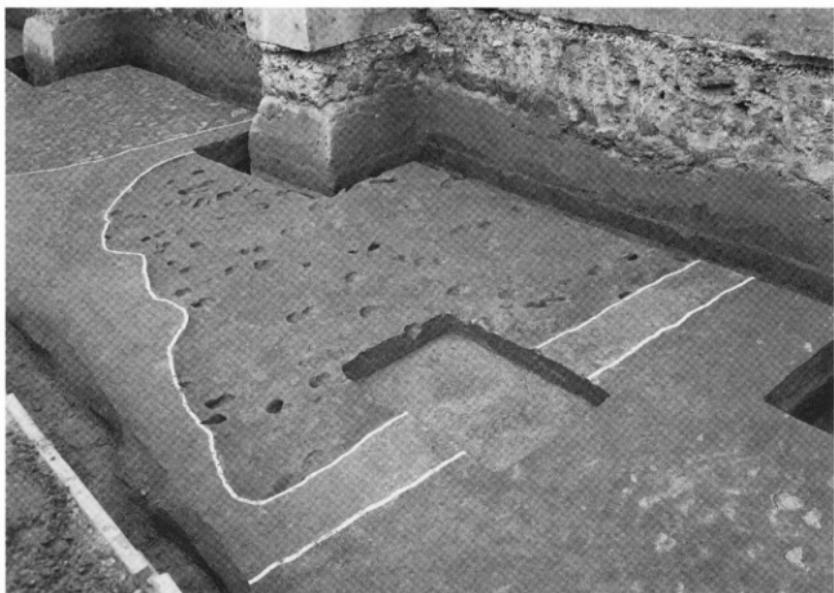
S B-01検出状況（東より）



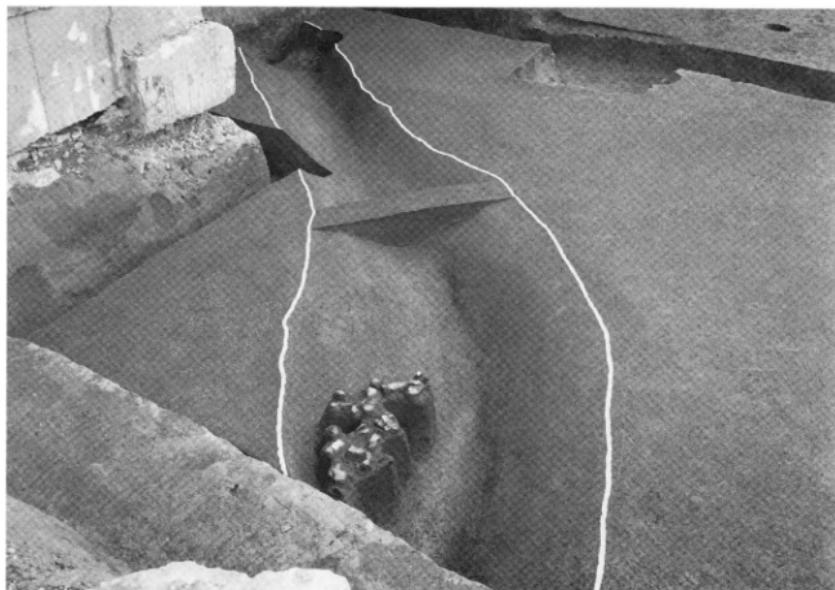
S P-49・50検出状況（北より）



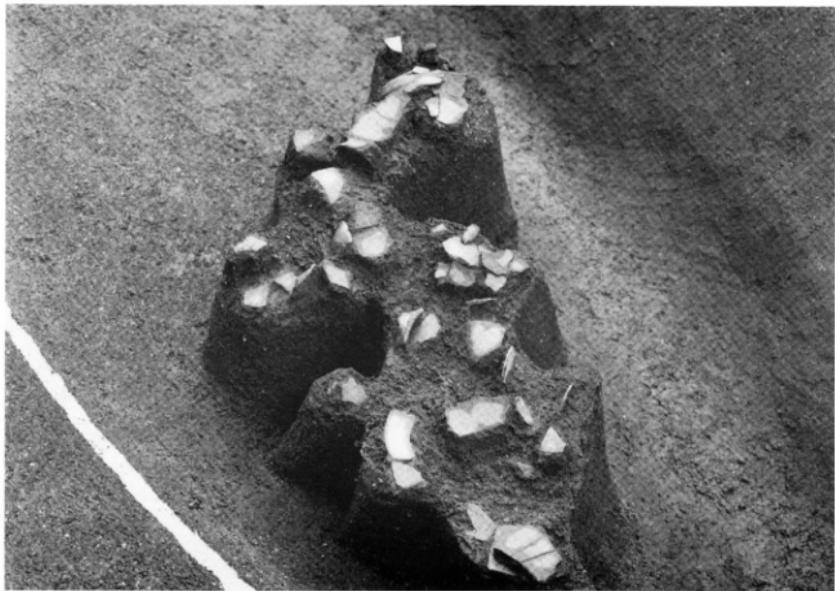
水田跡検出状況（南より）



水田跡検出状況 S N-01~03（南より）



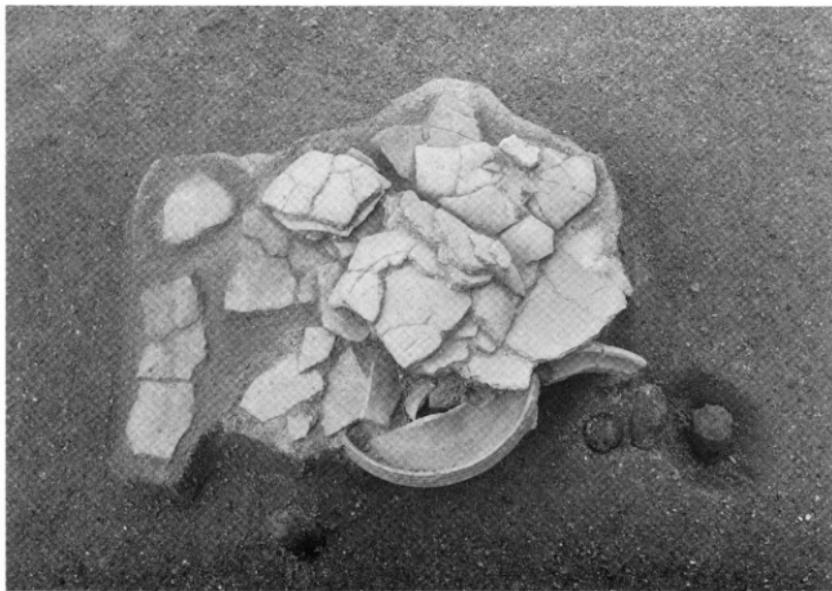
S D-17検出状況（東より）



S D-17土器出土状況（東より）



S D -18・19、S K -14他検出状況（南より）



S I -01土器出土状況（南より）



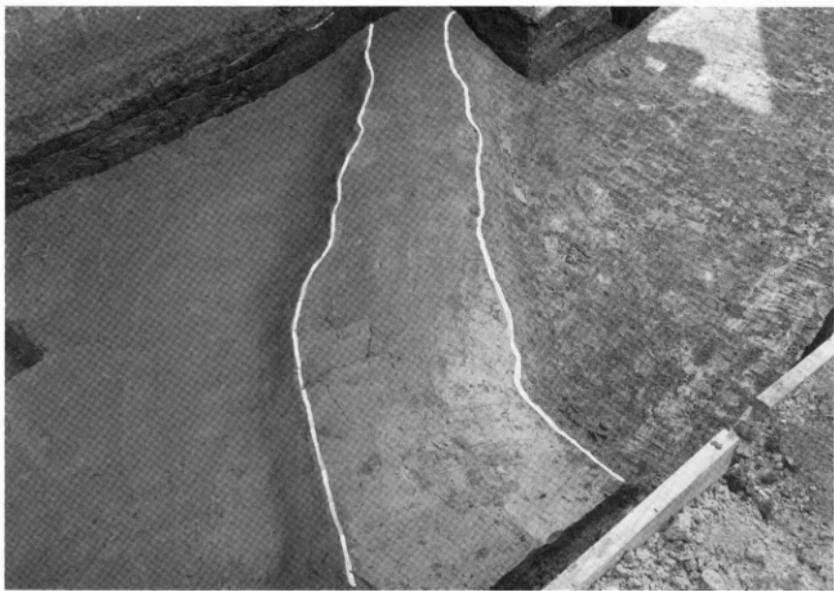
S I - 03土器出土状況（西より）



S I - 02土器出土状況（東より）



S N-08検出状況（南より）



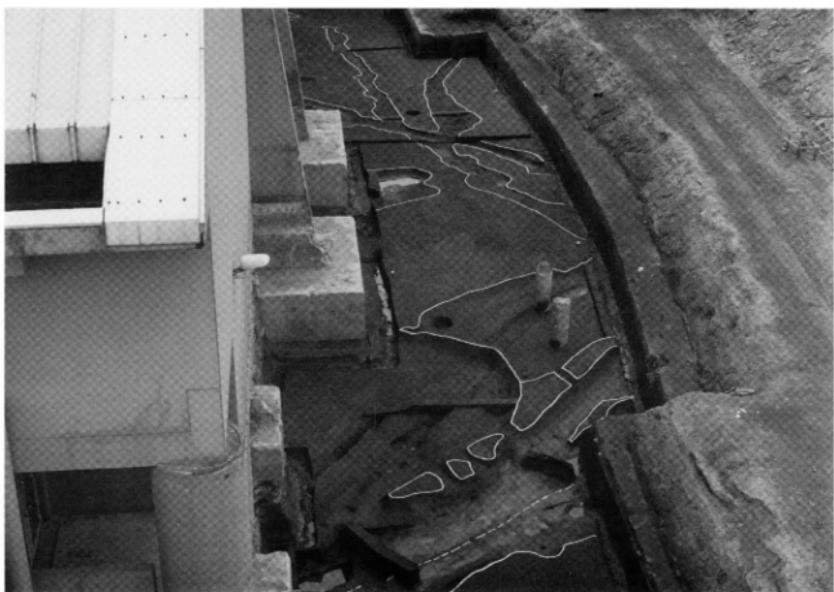
S N-09検出状況（西より）



S N-09検出状況（東より）



S N-09検出状況（南より）



S R - 04 • 05、S D - 25 • 26他検出状況（東より）



同上



S D-20検出状況（西より）



S D-21検出状況（南より）



第5遺構面 SR-05しがらみ検出状況（北より）



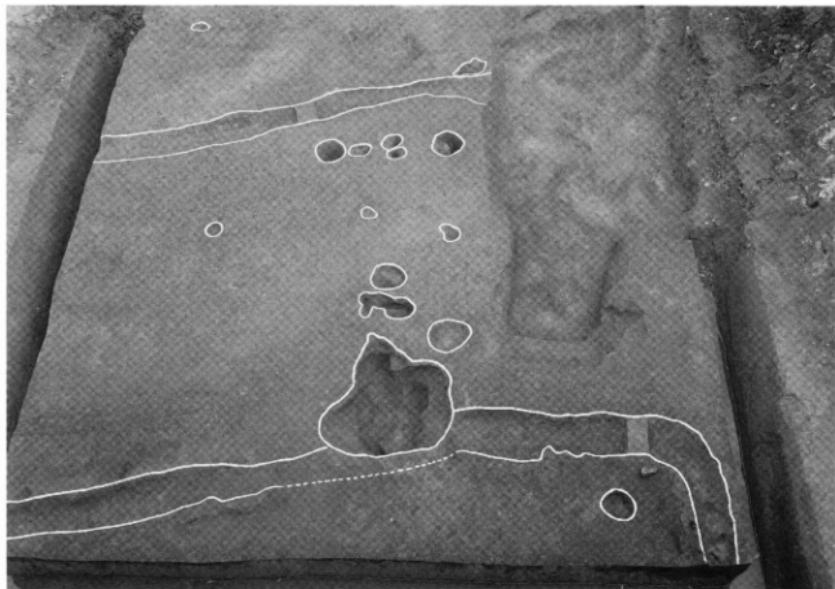
第6遺構面 SD-36、SR-05他検出状況（東より）



SK-09他検出状況（西より）



SK-09縄文土器出土状況（西より）



第3遺構面 S D-01・02、S K-01検出状況（西より）



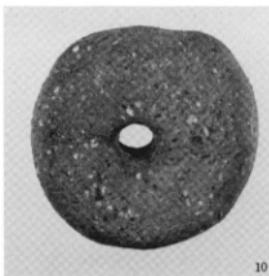
第4遺構面 S R-01、S K-02検出状況（南西より）



SR-02、SD-03検出状況（南東より）



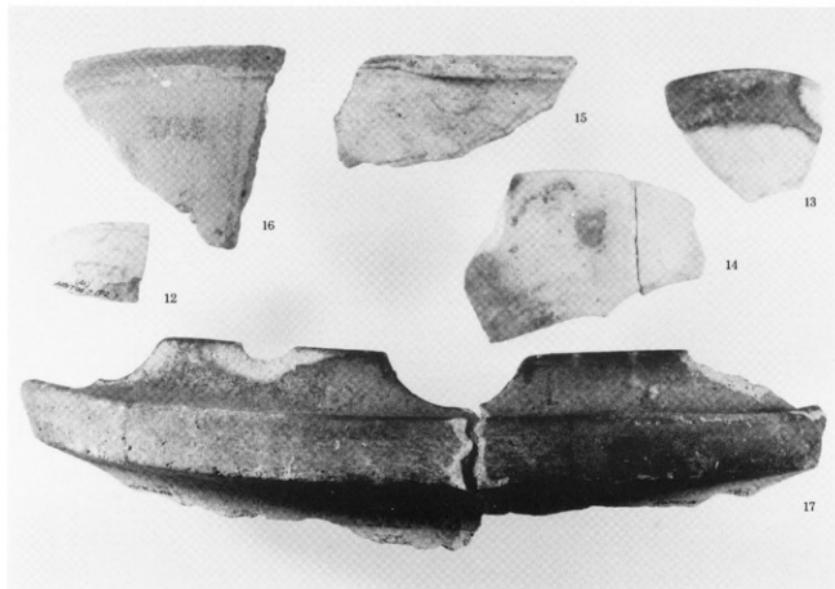
SR-02上層断面（南東より）



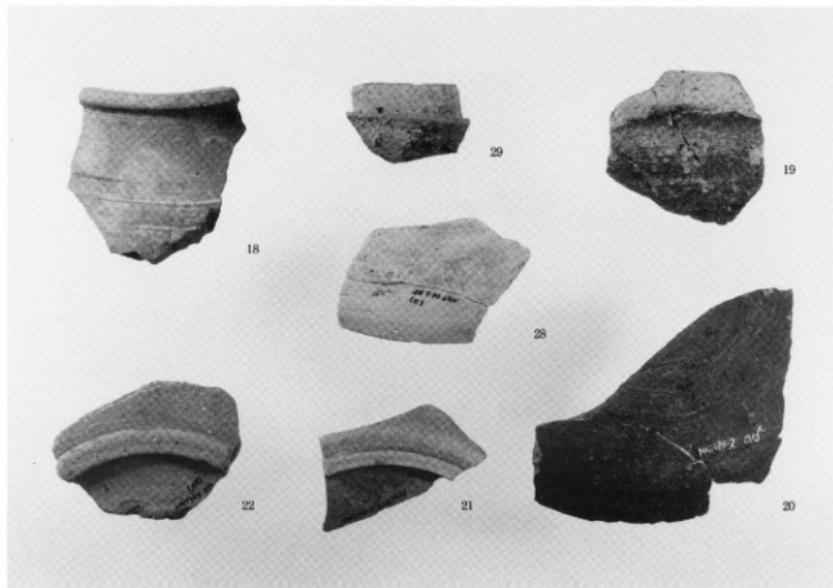
染付段重、仏飯器、土人形、土鈴、土馬、紡錘車、錢貨



染付碗、美濃菊皿、陶製插鉢



東播系須恵器、瓦器椀、羽釜

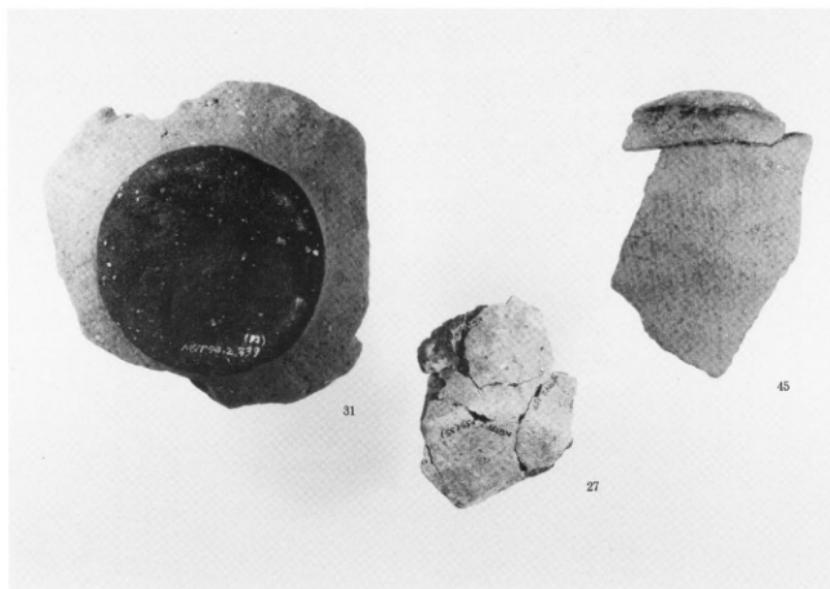


第2・3遺構面出土須惠器



第3遺構面出土土師器甕

S R - 05出土弥生土器無頸壺



第3・5 遺構面出土弥生土器



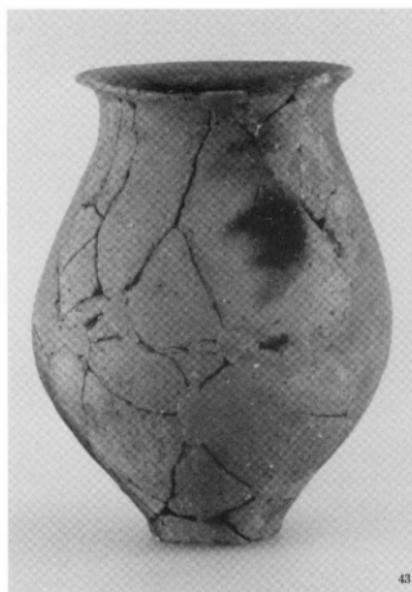
第4 遺構面出土弥生土器、土師器高杯



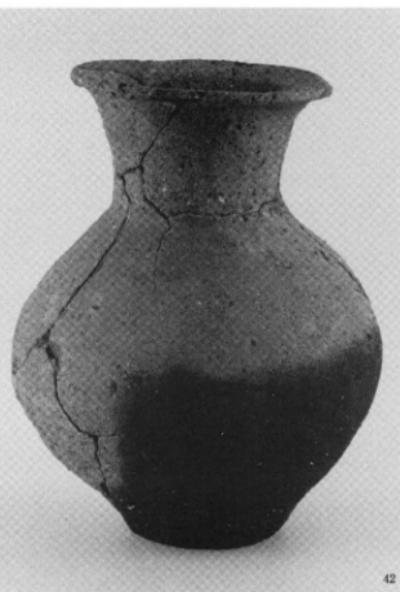
第4 遺構面出土高杯



弥生土器把手付小形鉢



S I - 03出土弥生土器壺

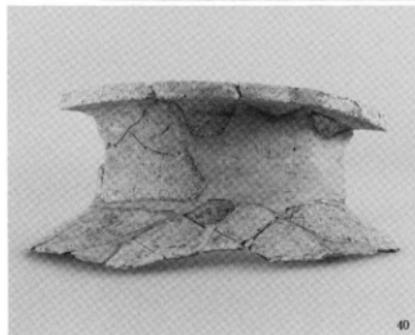


S I - 03出土弥生土器壺



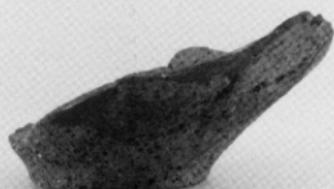
39

S I - 02出土孃生土器壺



40

S I - 02出土孃生土器壺



41

S I - 03出土孃生土器



38

S I -01出土弥生土器壺



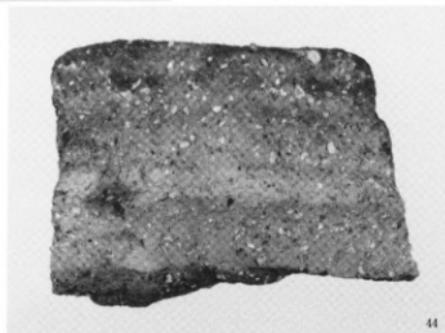
48

S K-09出土繩文土器（口縁部）



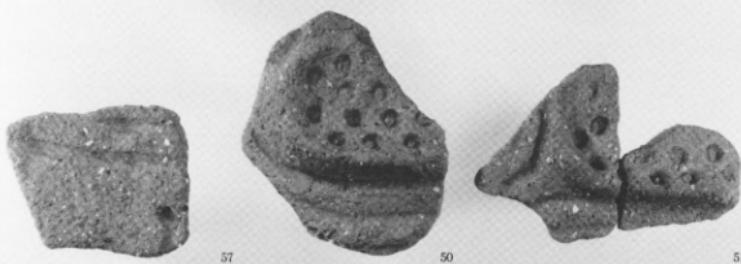
64

S K-09出土繩文土器（底部）

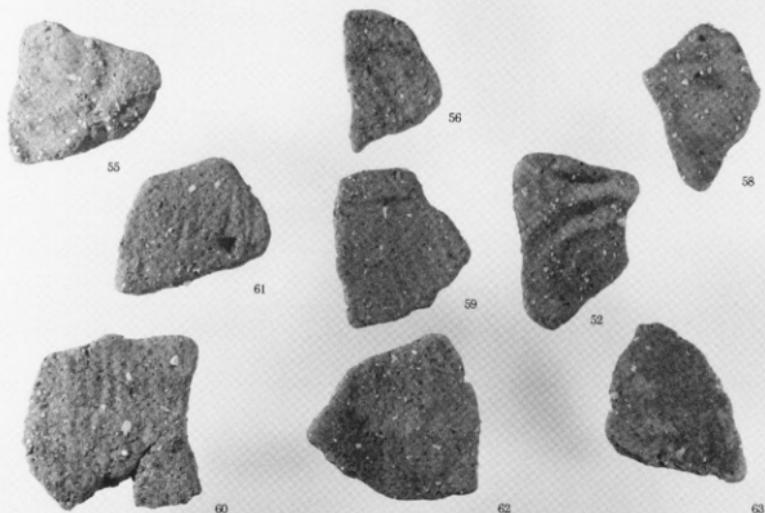


44

S D-26出土土器



S K -09出土繩文土器



同上



11



23



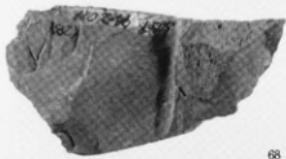
65



66



67

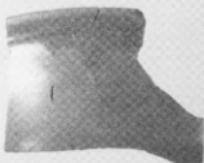


68

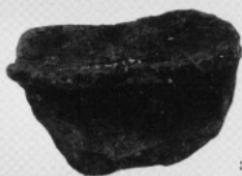


69

(上) 砧石 (中) 石器 石鏽、石錐 (下) 石器 剝片



24

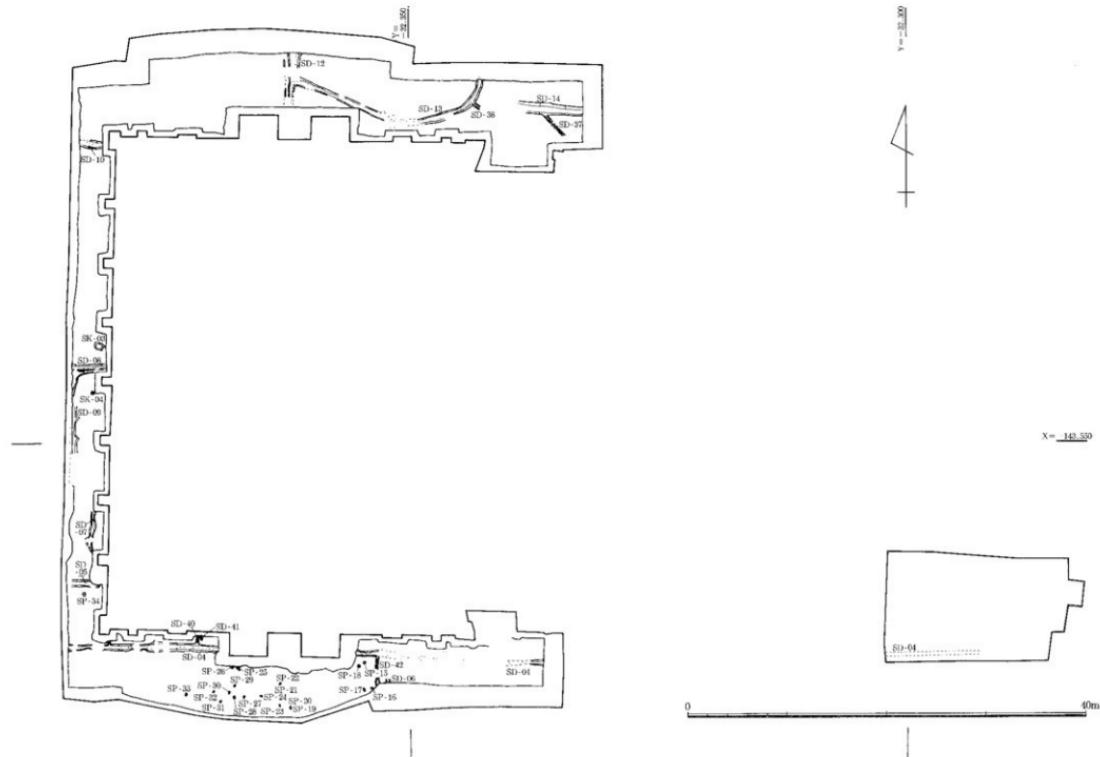


30

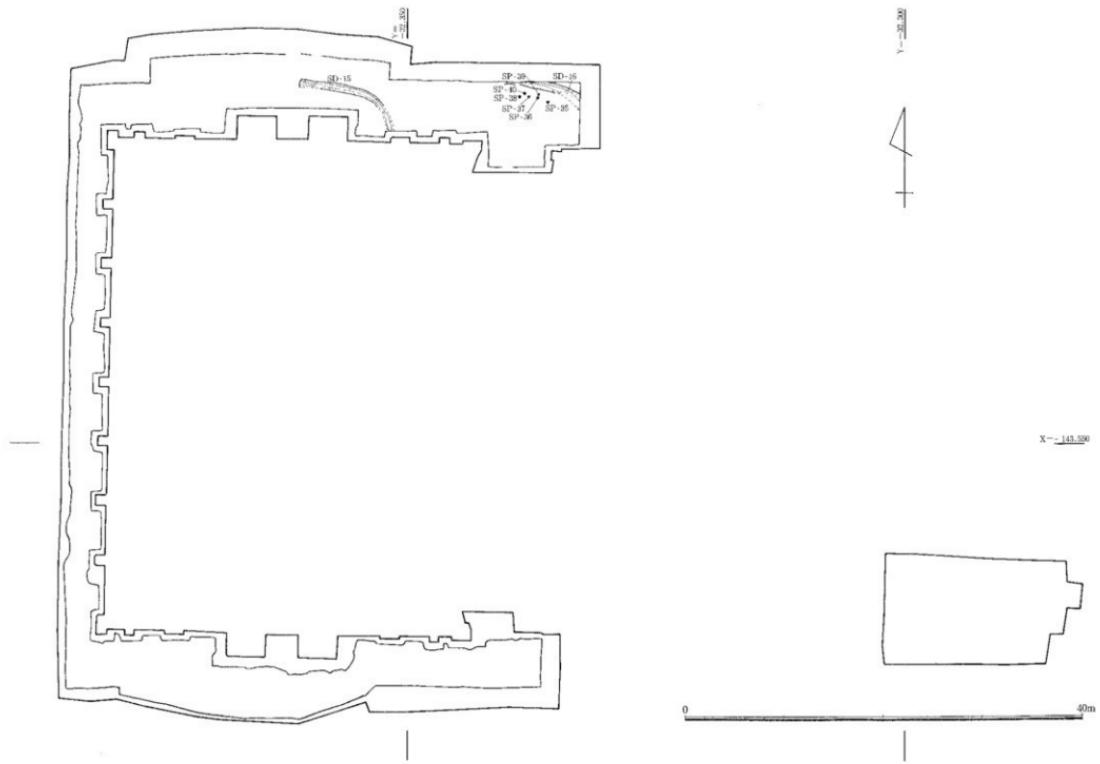


31

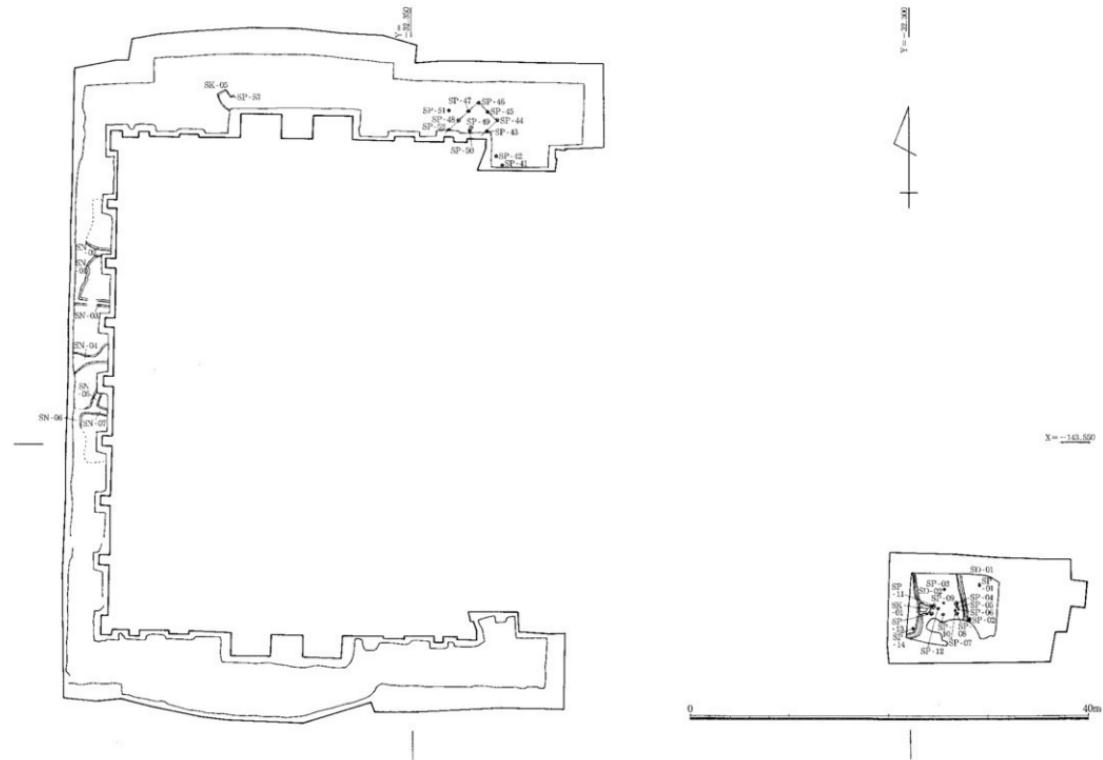
B区出土土器 青磁、瓶把手、弥生土器



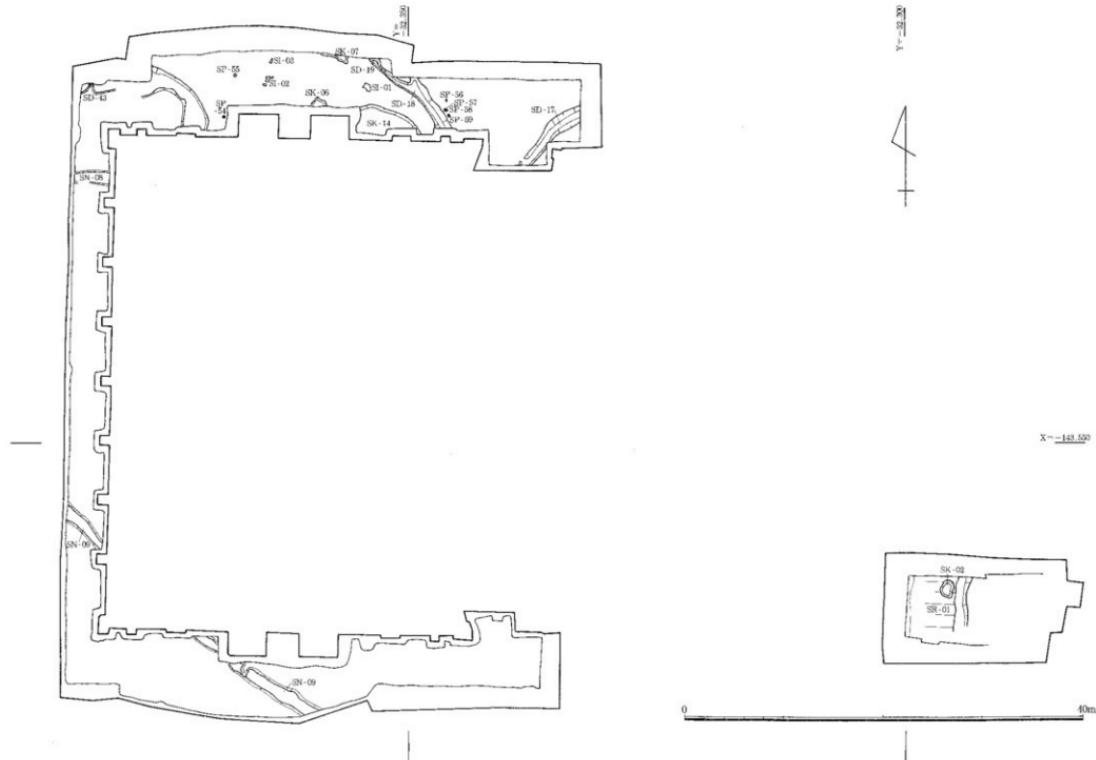
付図1 第1遺構面全体図



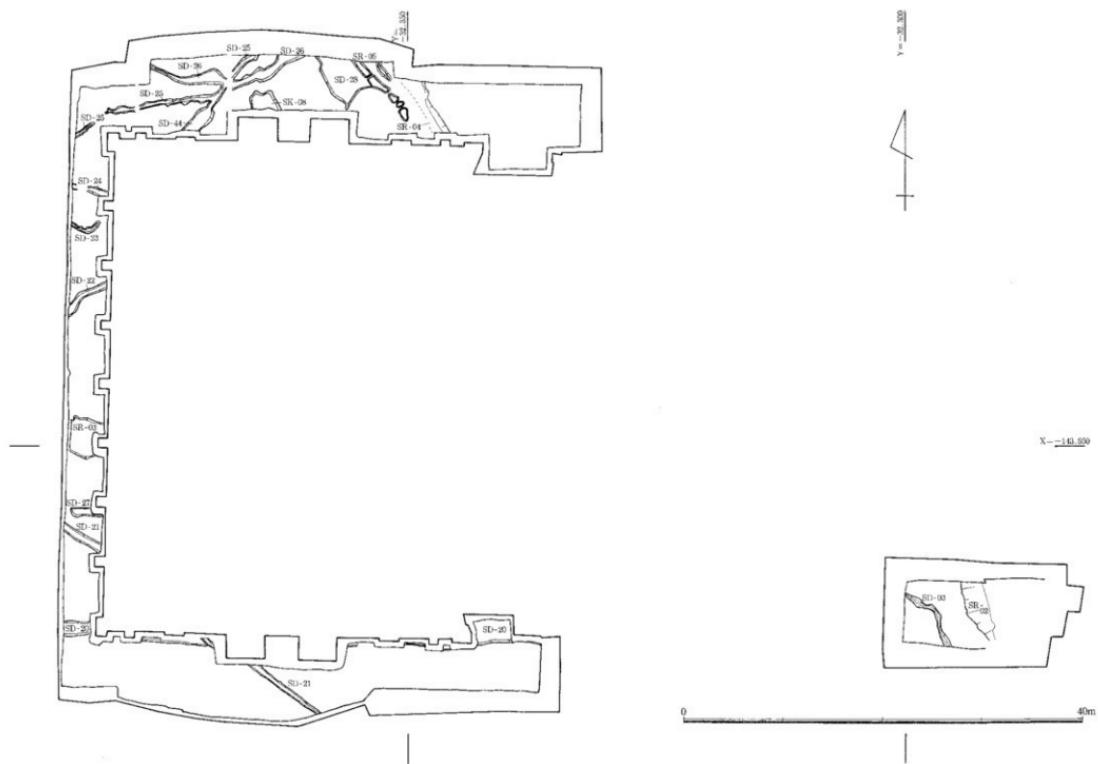
付図2 第2遺構面全体図



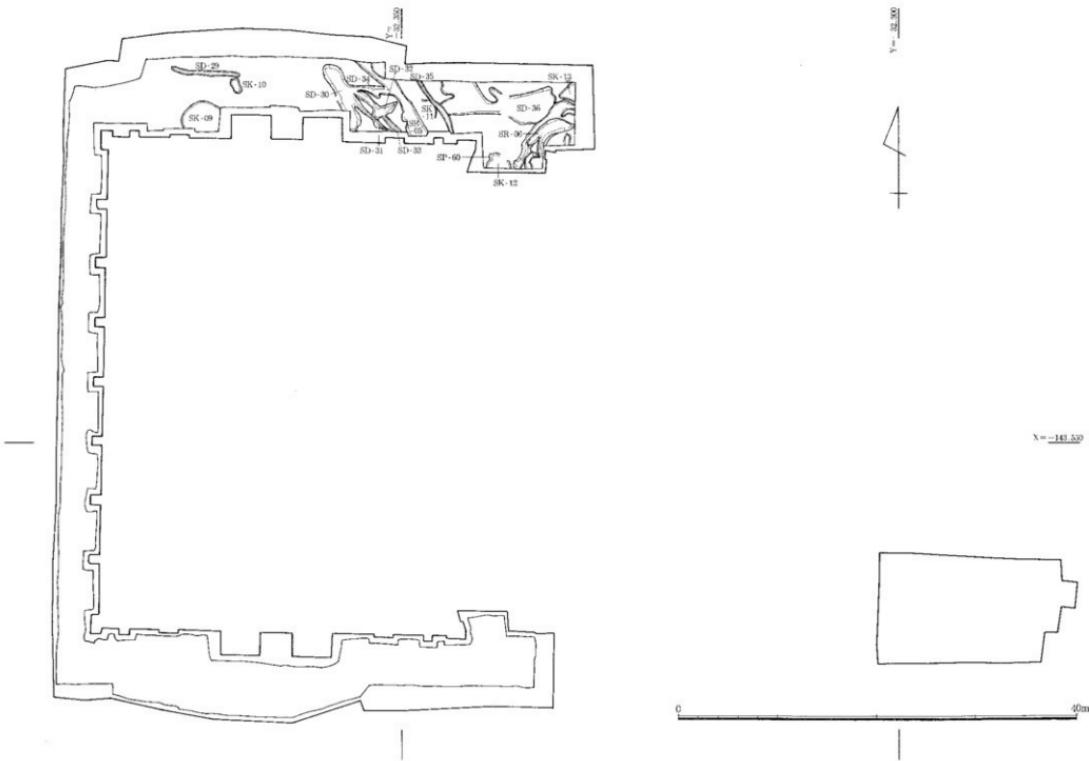
付図3 第3遺構面全体図



付図4 第4遺構面全体図



付図5 第5遺構面全体図



付図6 第6遺構面全体図

